

產政塾

Ⅸ



產政塾

この編は、三十歳前後の前途有為な若者が
溢れる心の叫びを綴ったものである

目次

● 産政塾Ⅷの発刊によせて

(財)中部産業・労働政策研究会

足達廣紀

● 海外生活を経て思うこと

松坂屋労働組合 足立貴彦

● いつかは立派なことを、語れる人になりたい

トヨタ自動車(株) 石井直生

● 雑談

豊田工機労働組合 伊藤裕介

● 私の友人・先生・上司

全トヨタ労働組合連合会 宇野庄市

● 趣味は「クルマ」

豊田合成(株) 江口淳

● タイムイズマナー(時は金なり)

中部電力(株) 見城篤

43

35

25

17

9

1

• ターニング・ポイント 53

丸栄労働組合 榊原悦人

• 明日の暮らしを考える 59

豊田市役所 柴田徹哉

• 新しい世界で感じていること 65

トヨタ車体労働組合 須崎辰彦

• 感じることを気ままに……人生の転機は刺激的(題名負けですッ!?) 71

中部電力労働組合本部 玉木健二

• 『平和』ってなんだろう 79

アイシン労働組合 恒川智行

• Gへの想いと思い出と 85

関東自動車工業(株) 中出裕之

• 子供たちは将来の宝物 91

トヨタ自動車労働組合 浜口誠

• 記念写真 97

(株)デンソー 林克憲

• 来るべき時が来た 105

アイシン精機(株) 平岡典明

● 元気に生きる！	トヨタ車体(株)	本 多 篤	113
● 海外ひとり旅ノススメ	デンソー労働組合	前 川 武 治	121
● 自分をさがして	名古屋鉄道(株)	山 田 泰 準	127
● 最近思うこと	アラコ(株)	山 本 雅 章	135
● 楽ちゃん！楽ちゃん？の産政塾	中部産政研	丹 羽 研 次	143
● 産政塾活動記録			149

産政塾Ⅸの発刊によせて

(財) 中部産業・労働政策研究会が主催している若手セミナー「産政塾」が、この度第九期を終えました。

産政塾は、異業種の若者にご参加をいただき、約一年間に渡って行うセミナーであります。

セミナーといっても、あらかじめテーマやスケジュールを決めて講師の指導を受けるといった通常のスタイルではなく、参加したメンバーが自らの企画でテーマや講師を選び、現地に出向して体験や教えを請うという活動を通して、学ぼうとするものであります。

また、産政塾は異業種の人達の集りであり、多様性を取り入れた論争の場でもあります。企業や仕事の枠を超えて、お互いが夢を語り、天下国家を論じ、講師を交えて論争をし、論争の中から新しいエネルギーを生み出そうとするものであります。

こうした活動を通して、参加者は自らの考えを検証し、自分自身の存在や役割を自覚するという、言うならば自らを磨く道場といったものであります。

今回、産政塾に参加した人達は三十才前後の若者二十一名であり、意欲においても能力においても次代を担うにふさわしい人材の集りになりました。

人間形成の基本の時期は青春期であるといわれておりますが、仕事や家庭における人間としての枠を形成するのは三十才前後からの十年ぐらいといえます。一応仕事にも慣れ自分で判断できる能力もできつつある。精神的にも肉体的にも充実しており、仕事面でも家庭面でも先頭に立って活動する時期であります。

こうした若者達の集りである産政塾は、約一年間に亘ってお互いが夢を語り、自らの企画によつて

その実践に情熱を注ぎ、そしてこの度セミナーを終了いたしました。

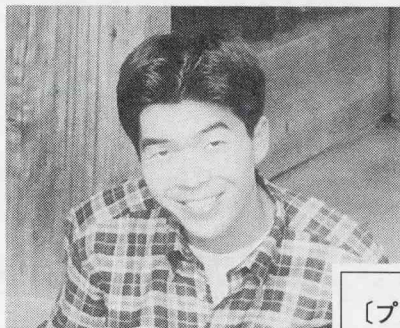
このセミナーを通じて、参加者一人一人が新しい次代に対応するパラダイム、ものの考え方を築くための「何か」を得ることができたものと確信しております。

この冊子は、第九期生がセミナーを通して得た様々な体験をふまえて、自らの想いを「若者のロマンと叫び」として綴ったものであります。ぜひご一読をお願い申し上げます。

また、産政塾は極めて小規模の催しであり、参加してもらうのは限られた人達であります。こうした冊子を通して一人でも多くの人達の共感を呼ぶことができればと思つて発刊をした次第であります。塾生と同世代の人達の糧となることはもとより、指導的立場にある方々にとつても参考になることが多いと思います。

なお、産政塾の運営に対して格別の理解と協力を賜りました講師の方々をはじめ関係各位の皆さんに感謝を申し上げますと共に、産政塾および塾生に対して今後共ご指導・ご声援を賜わることができれば誠に幸いです。

海外生活を経て今思うこと



松坂屋労働組合

足立貴彦

〔プロフィール〕

- あだち たかひこ (27歳)
- ・ 1971年 東京都生まれ
 - ・ 1995年 (株)松坂屋 入社
婦人ドレス・コート売場に配属
 - ・ 1997年 松坂屋労働組合名古屋支部書記
次長 (専従)
 - ・ 1998年 松坂屋労働組合中央執行委員
現在に至る
- 〈家族〉 妻、長女
- 〈趣味〉 スキー、映画鑑賞、モータース
スポーツ観戦
- 〈モットー〉 家庭第一

〈はじめに〉

八月に第九期産政塾の最終回を迎え、塾誌の原稿についての説明があった。締め切りは十月末、まだ時間があるから大丈夫と悠長に構えていたら、あつという間に締切日になってしまった。テーマは「自由」。一番難しいお題目である。過去の塾生の方々は一体どんなことを……、過去の塾誌をパラパラ開いてみると、みなさん難しいテーマを表現力豊かに綴られており、これは太刀打ちできない、私は、今思っていることを素直に書こうと開き直りワープロと向き合っている。

〈海外での生活〉

父親の仕事の関係で、過去二回海外に家族揃って住んだ。一回目は四歳から六歳までの約三年間。二回目は十六歳から十八歳までの約二年半、いずれもスイスのジュネーブで過ごした。

一回目は、現地のフランス語の小学校に通い、最初こそ戸惑いはあったもののすぐに慣れた。自分で言うのもなんだが、幼少の頃の言語に対する適応能力というものには驚くべきものがあり、私も一年足らずでほとんど不自由なく日常会話ができるようになった。当時録音したテープが残っているが、今聴くと自分が何を喋っているのかさっぱり理解できない。不思議なものである。

二回目は、高校一年生を終えた後、現地の英語の学校に編入した。この件については、行くべきかどうか非常に迷ったが、家族揃って暮らせるうちはなるべく一緒に暮らそうという両親の考え方もあり、ついに行くことにした。「一年間も現地の学校に通えば、言葉には不自由しなくなる」「昔の記憶

がすぐに戻ってくる」そんな親戚の言葉にも見送られ、行つてはみたものの、このとき感じた文化の違い、言葉の壁の高さというものは並大抵ではなく、何度となく日本に残っていればよかったと思つた。これほど日本の、独特の文化、住みやすさを美化したことは今だかつてないように思う。

〈帰国〉

一九九〇年八月、高校三年生で帰国し、日本の高校で半年間を過ごした後、卒業後大学へ進学。日本はバブル崩壊直前であり、約三年前に日本を離れたときに比べても、全体の生活レベルがかなり上がっているように感じた。何よりも驚いたのは、本場ヨーロッパでもあまり見かけない高級車がごろごろ走っていたことである。

やはり日本はすごい。物はなんでもそろっているし、生活水準もこんなに高い。そんな思いが私の中の大半を占めていた。また、日本人全体が今後さらに住みやすくなっていくであろう日本という国の姿を想像して疑わなかった時期だったのではないだろうか。一方で、果たしてこれが本来あるべき姿なのだろうか……。ふと小さな疑問を感じたことも事実であった。しかし、日本のすばらしさだけが全面に感じられていた時、そんな思いはいつしか頭の片隅に追いやられていた。ただ一回、何かはわからないが、少しおかしいのではないか。そんな意味のことを、帰国子女枠で受験したある大学の試験で英語の論文に書いたことを記憶している。余談ではあるが、後の面接でその論文は七十点と評価された。相当英語力がある人間なのだと勘違いされないように、一応付け加えておく。

大学入学後まもなく訪れたバブルの崩壊。世界的にも大きな影響を及ぼす不景気という名の大津波

が日本全体をおそった。私が大学時代所属していた教育学部、日本語教育学科は、外国人に日本語を教えるための教師を養成するための学科である。景気のいいときは日本へ進出してくる外国企業も多く、それに伴い日本語教師の需要も増えていったが、バブル崩壊後は徐々に撤退する企業も増え、日本語教師の需要も少なくなっていく。そんな一面からも深刻な不景気を感じ取ることができた。

〈就 職〉

世の中の不景気。学生時代も認識はしていたが、それほど深刻な問題として捉えていなかった。まともに感じるようになったのはやはり就職後。運良く就職できた今の会社も不景気のおおりをものを受けている。折しも今所属しているのは労働組合の専従。いやでも経営に関する情報は入ってくる。会社はこの事態を何とか打開すべく様々な内容を検討しては実行に移そうとし、組合は、それらの内容に対し、一方では組合員の生活を守るという立場、もう一方では会社の業績回復のために検討に検討を重ね、意見反映、提言活動を行う。そこには、私が感じる限り莫大なエネルギーが必要とされる。日本中で同様のことが行われていると思うが、ではなぜこれだけ企業の発展、人を守る体制の強化というものが進められているのにもかかわらずそれらが社会に反映されている実感がないのか。そんな疑問がここ一年間ほど私の中を駆けめぐっている。この点について、社会全体がもっと別の角度から現状を見つめる必要性があるということは感じるのである。

〈日本人の危機感〉

先に述べたように、私は過去二回海外での生活を送った。今思うと一回目は、いわゆる言語形成期といわれる、文字通り人間の基本的な言語、そしてその性格などが形成されていく時期である。二回目はいわゆる思春期と呼ばれる時期であり、様々な物事を感じてはそれが様々な思いへとつながる時期である。この二回の滞在は、私にどんな影響を与えたのか、今までそれほど考えたこともなかったが、最近やはりこのことが影響しているのではないかと思われる考え方が、自分の中に「危機感」という言葉となつて存在しているような気がするのである。

これは私個人の見解であるが、最近の日本人には危機感というものが非常に薄れているように思われる。その背景には、日本の学校教育や、企業の終身雇用制度などがあるのではないだろうか。この二つは、今の日本を築き上げてきた二本柱と言ってよい。確かにこの二本の柱なくして今の日本の発展はあり得なかつただろう。しかしそれらがこれから未来にかけても通用するかは疑問が残る。なぜなら、それらは非常に過保護な制度のように思えるからである。例えば、学校教育。授業については、とやかく言うことはできないが、問題は学校と家庭の責任の線引きが非常に曖昧である点である。「ヨーロッパでは、学校内で起こった問題に対しては学校が責任を持つが、一歩校門から外に出て起きた問題についてはすべて家庭の責任になる」と母親が驚いていたことを記憶している。日本の場合、どちらで何か問題が起きても、学校側の管理の怠慢、家庭でのしつけ悪さなど責任のなすり合いになることもしばしばおこる。それぞれの責任分野を明確にし、お互いが責任感と危機感を持つことが大

切ではないだろうか。また、終身雇用制度については、仕事が無くなったときの危機感はおろか、個人の独立心までも取りあげてしまうような制度に感じられる。最近経営の悪化により、終身雇用の前提を覆し、リストラを行う企業が多い。しかし企業がその業績を安定させるためにリストラを行うことは、一つの政策として認めて行くべきだと私は思う。むしろ問題は、リストラされた人達のアフターケアをどうするかということだが、その対応は非常に手薄ではないだろうか。欧米のように、自分に合った仕事に出会うまで転職を繰り返しても、多くの職を経験したことが、その人の魅力となるような風土が本来のあるべき社会の姿ではないだろうか。

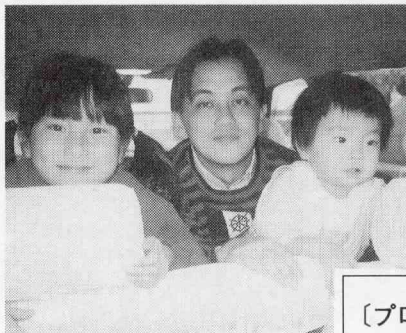
今、この不景気を脱出するために企業が、そして国全体が行っていることの多くは、いかに消費を拡大させるかということに重点を置いている。そのために、あらゆる物を、あらゆる場所で、あらゆる時に手に入れることができる社会を作るため、規制緩和なども行われている。しかし、お金さえ出せばあらゆるものが手に入る状況が果たして消費の拡大へと繋がるのだろうか。私はそうは思わない。それは、個人の危機感をなくし、ぬるま湯の社会を作り上げてしまうことになり、発展とは異なる方向性を示するように思われる。今日日本人は「危機感」について改めて見つめ直す必要があるのではないか。そんなことを考える今日この頃である。

〈終わりに〉

色々述べてきたが、これはあくまで私個人の見解である。決して専門的な知識があるわけではなく、ただ数年にわたる海外での生活経験で感じたことを述べただけである。従ってすべての面においてこ

の見解が当てはまるとは思っていない。ただ、世界的な視野に立って今の日本、そして自分たちを見つめ直す機会の必要性を感じている。

いつかは立派なことを、 語れる人になりたい



トヨタ自動車(株) 人材開発部

石 井 直 生

〔プロフィール〕

いしい なおき (35歳)

・1986年 トヨタ自動車(株) 入社

〈家族〉 妻、長女(7才)、長男(1才)

…長男は産政塾の第1回会合の時に
生まれた。

〈趣味〉 サッカー…最近は専ら観戦。ピクシーが今年で退団かと思うと寂しくて、涙ぐんでしまう。

読書 …幅広くなんでも。最近では「7つの習慣」に影響されている。

宴会 …娘は、「パパのお仕事は宴会」だと、最近まで信じていた。

一、休日の午前……課題認識

ランチを摂りながら、新聞を隅から隅まで時間をかけてじっくり読む。優雅な休日の朝である。足元では一才の息子がミッキーマウスのぬいぐるみを痛めつけてキャッキャッと喜んでいる。なんて無邪気、なんて可愛らしいのだろうか。のどかな休日。ちなみに、長女は小学校、妻は仕事で不在。つまり、今日は、子守り当番。実際には優雅ではなく、辛い一日になりそうである。長女が戻ってくるまでに、ポケモンのフリーザーのレベルを百まで上げておくという約束はしてしまったし、結構多忙ではあるが、別に嫌ではない。はつきり言って幸せを感じるひとときである。

さて、新聞の紙面には指名解雇やら、学級崩壊やら、環境ホルモンやら、年金制度見直しやら……やれやれという記事に溢れている。景気は回復への胎動が感じられたり、底を打ったりするらしいが、まあ、総じて明るくはないし、将来に渡っても、私たちがこれまで暮らしてきたほどの能天気で明るい時代がやってくることもなかなか考え難い。一体、無邪気に遊ぶこの子らは、どんな人生を送るのかなあ、ハッピーになれるかなあ、などと、これは心配になる。手前の老後なんかはどうでも良いが、子供が幸せな人生を送れるかどうかは大問題だ。

今年はいさぎ年。年男である。こうした節目の歳に、折角の機会をいただいたので、これからの時代をどう生きるか・生きたいかを自分なりに整理し、子供達のために私は何ができるかを考えてみたいと思う。

二、ポイント①自分の事は自分でやる

これからの時代を考えた時、とりあえず確かな事は、これからは国やら会社やらにあまり頼つてはいけないということだと思う。まあ、期待はしても当てにはできない、ということだ。

年金制度なんかはまさに顕著な例であるが、自分で考える機会を収奪され、真面目に制度維持に協力させられた拳句のはてに、「制度変えたからよろしく」というのもいささか乱暴な話という気もするが、これからは、きつと、こうした事は当たり前になってくると思つた方がよいし、みんなそんな事にはとづくに気づいている。マインド不況なんていわれるのも「老後を考えると、国なんか信じられへんから、自分で貯める」という意識の顕れだし、地域振興券についてもどちらかというと懐疑的な声が多いのも、国やらなんやらに対する不信感の表れだろう。（地域振興券自体はもらつてみると、うれしいと思つてしまうのが情けないのだが。また、振興券がらみでいろいろ販売促進策を考える商店の皆さんのご努力ぶりを拝見すると、もしかしたら、景気の回復は近いかも知れないと感じたりもする。）

いずれにしても、キーワードは「自己責任」である。要は自分の事は自分でちゃんとやるということだから、それが全うできていない、金融機関への資本注入やら、ゼネコン救済には、必要性は理解できるものの違和感がある。一方で、自分達が危ない時には守つて欲しいという甘えが同居しているのも事実。その辺りの考え方は改めなくてはいけないし、前提として、責任を取る事がやぶさかではないと感じられるような、社会づくりは必要になってくると思う（具体的なイメージはありませんが）。

これは仕事の面でも同様である。自分自身を振り返って見ると、入社以来これまで、長期雇用を前提としたシステムの中で、随分育てられてきた、と思う。いい上司に恵まれ、常に能力向上が図れる職務を与えられ、いつも楽しく会社生活を送る事ができた。この産政塾への参加も同様である。私にとって会社は、学校以上に楽しく、そして、成長できる場所だったのだ。だからといって、これからもそれを会社に期待すべきではなからう。高齢化・高資格化が進む中、会社だって、そうそう都合よく個人の育成ベースの職務を用意できるはずがない。そうなると、取り敢えずは与えられた仕事の中で、如何に成果を発揮できるかが重要であり、それを評価される事によつてはじめて、新しい職務が獲得でき、言ってみれば自己実現も可能となる。そして、この繰り返しにより、「自分」で成長を促進する事が要求されていくのであらう。勿論、会社としての育成は若年層を中心にこれからも継続されると思うが、自らの研鑽意欲と研鑽努力なしには、楽しい会社生活は送れなくなると考えなくてはいけない。が、逆に言えば、能力さえしつかり身につければやりたい事もできるわけで、厳しい反面で、やりがいもあるわけだ。いずれにしても、研鑽・成果それぞれにおいて、自分のことは自分で考え、そして自分でやっていく事を原則として、自ら徹底しなくてはいけない。

三、ポイント②感性を磨く

そうはいっても、いつも思い通りに成長できたり、やりがいのある仕事をゲットできるとは限らないし、そもそも会社あるいは仕事中心に生きがいを求める考え方自体は早晩、限界がやってくる。実際にそんな状況が既に進展している面もある。自分のアイデンティティをいろいろな場面で確立して

いる人が増えているのだ。しかも、現在は「仕事以外に何かを求める」というレベルではなく、元より様々な価値観を同時に保有・両立していく事が当たり前の時代になりつつある様だ。スポーツもやるし、ボランティアもやる、家族も大切にするし、勿論、仕事もしっかりやる。何もレオナルド・ダ・ヴィンチみたいな人を目指そうなどという大それたことを考えているのではなく、他人が成功を決めるのではなく、自分で自分の成功を「感じる」、そして満足するような多面的な生き方が若年層を中心に一般的になりつつあるのではないかと考えられるし、そうあるべきだと思う。

余談ではあるが、これまでの人事施策は基本的に従業員が仕事を通じて自己実現し、幸せになつて欲しいという考えを基本におき、どちらかと言えば画一的な育成システムとして有効に機能していたと思う。会社生活で必要な知識やスキルを教育し、それを発揮する事でやりがいも感じ、処遇もあがる。勿論会社も利益がでるが、それと同じように従業員も幸せになつてきた、という事である。その基本フレームがフルモデルチェンジされるわけではないが、仕事を中心に据え、そこにのみ「生きがい」を集中させるのは、困難になりつつある。多面的な価値観をベースにした人生観が主流になつてくると、人事施策も大きく変えざるを得ないのではないかと思うし、実際、変わりつつある。画一的な制度設計は難しいし、やめるべきであろう。

さて、価値観の多様化を語るまでもなく、これからは「感性」という言葉がもう一つのキーワードになるのではないかと考えられる。例えば、複雑系といわれ、従来の延長線では正しい答えが見出せなくなった時代には、「感性」というツールが非常な役割を担う。もちろん、ここで言う感性とは、思いつきということでは決してなく、数ある情報の中から、数少ない価値ある事実をしつかりつかみ、

そして判断するためには「感性」が必要であるという意味である。言い換えれば、従来以上に論理的な思考の積み重ねをベースにしつつも、判断するためには「感性」を駆使することが求められるということである。

元来、ある意味で日本を支えてきた官僚社会は、「現代社会が内包するテクノクラートの台頭という問題」としてマックス・ウェーバーが著書「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」のなかで、言及していた。社会の発展・拡大にともない業務は細分化され、専門化されていく。そして本来の組織の目的を見失った「精神なき専門人による支配」という現象が起こり得るという内容で、官僚社会出現を危惧していた。官僚が支える時代が終焉する（かもしれない）現在は、この「精神なき専門人」による支配の末期（？）と言えない事もない。いずれにしろ、重要な事は、私たちが精神を無くす事なく、「感性」を駆使すること、おかしい事はおかしいと、また良い事は良いと、感じ続けることである。その権利の放棄は単に支配者が変わる事を眺めることと同義である。感性は自分の趣味趣向のみに発揮するものではない。（誰かに支配されている方が楽…なのかも知れないが）

四、子供達に語りたい

さて、自分のことは自分でやるような人生をこれから送ろうと考えているのだが、子供達には、何をしてやれるだろうか。たくさん資産を残してやれるハズもなく（ゴメン）、せめて借金は遺産ないようにしなくては、といっただらしない事を考えるのが関の山である。

自分が死んだ時に、子供達に「お父さんはどんな人だった」と言われたいのか。これが、人生観を

考える上で最適なテーマであるような気がする（これは「七つの習慣」という本を読んで感銘を受けた内容の一つである。尤も、家族中心のみの考え方では不足である、とも記されているのだが）。

「お父さん。お父さんはいつも笑顔で誰にも優しいし、何からも逃げない、そんな人でしたよ。」と、娘には言われたい。

「お父さん。お父さんはいつも、人の話を聞いてくれるし、お父さんの側にいるといつも元気ができましたよ。」と、息子には言われたい。そして二人から「誰よりも愛してくれました」と言われたい。今は、娘には「パパはかわいい」と侮られ、息子には「おうー、ああー（???）」と、評価され、目標との乖離は百万光年という感じである。平日は満足に会話する事すらままならない状態だが、いつかはそんな父親になりたい。

とにかく、とにかく、語り続けよう。今は、説得力がまるでないけれども。自分のことは自分でやる、そして感性に優れた人になろう。逃げずに、誰にも優しくなれるよう努力しよう。怒らないで人の話をしっかり聞こう。そんな姿を見せられるようにやってみよう。少しでも君たちの見本になるよう、自分を変えよう。他にはどうもやれそうな事はないみたいだし。

五、午前二時のアンソロジー

家族もみんな寝静まった夜更けに、グラスを傾けながらあれこれ考えたり、大好きな本を読むというのとはとても最高に心地よい。BGMに流しているビル・エバンスのピアノに混じって、たまに聞こえてくる田舎暴走族の、如何にも二流といった風情で気合が入っていないバイクの爆音ですら、許し

てやつても良いと感じられるくらいに気分は良い。そんな午前二時。

特に結論を出すことを急ぐでもなく、色々な事を想像し、時にボンヤリと視線が宙をさ迷い、時に不気味に笑みを浮かべている姿は、傍から見ると極めて危ない状態であろうが、本人にとってはまさに「至福の時」。加えて文章を認めるなんていう付加価値の高い(?) 行為を実施するとなると、これはもう、あやしゅうこそものぐるほしけれ、てな感じで、極めて楽しい。ハズなのだが……。その割にはこの産政塾向けの原稿は、遅々として進まなかった。見栄だとかが邪魔して、いいものを書くなんて考えるとロクな事がない。自分の書けることなんか、たかが知れているのに、なかなか、そこに気づかないのである。そして、本当にゴール目前で漸く、とにかく書くしかないことに気づく。まあ、早い話が、いよいよ締め切りが来てしまった、ということである。(昨年の塾生からは夏までに書けば良いとの引き継ぎを受けていたのだが……)

さてエクスキューズはともかくとして、とにかく原稿を終える事にしよう。気がつくともう、朝が近い。今日は、久しぶりに子供にたくさん遊んでもらおうか。

雑 談



豊田工機労働組合

伊 藤 裕 介

〔プロフィール〕

いとう ゆうすけ (33歳)

- ・ 1965年10月25日 愛知県名古屋市生まれ
- ・ 1990年 4 月 豊田工機(株)入社
人事企画課配属
- ・ 1997年 8 月 豊田工機労働組合専従
現在に至る

〈家族〉 妻のみ

〈趣味〉 文中にて

〈好きな言葉〉 気にしたら負け

はじめに

ついに最終通告が来てしまった。あと四人と書いてある。しかも、最終期限に間に合わない場合は、打ち切りと書いてある。この卒業論文を書くか、書かないかの二者択一の選択だ。私は即断を下した。「もう少し待ってもらおう」いや、冗談です。いつまでたっても原稿を出さない私に、根気強く付き合って頂いた丹羽さんの顔が浮かぶ。文章力の無い私ですが、素晴らしい産政塾の事務局の方、講師の面々、そして塾生の方々に出会えた証として、この卒業論文を書きます。

「何でもあり」の産政塾です。今の社会に対して憂いを嘆くか、はたまた古典文学に新しい見解を見出すか、我々の生きている現象さえも揺るがしかねない重大な事実、を書きたかったわけですが、そんな知識も、皆を納得させられる文章力もございません。内容ははつきり言っておりません。思い付くままに「雑談」を書きます。

スノーボード

いきなりですが、「趣味は？」と聞かれると、即座にスノーボードと答えます。始めて4シーズンですが、何でもこんなに面白いスポーツをもっと早くやっていなかったのだろう、と後悔することしきりです。

私はもともとスキーヤーです。その当時の好きなゲレンデは「八方の黒菱」と言っていたほど、コブ斜面を攻めることが好きなスキーヤーでした。スキーヤーは基本的にスノーボーダーが嫌いです。

当時の私もスノーボーダーが嫌いで、「あんなガキのスポーツやるものか!」と思っていました。が、ある日、リフトの上からスノーボーダーが気持ちよさように滑っているのを見て、また、スキーマの技術向上に行き詰まりを感じていたこともあり、嫌いであつたスノーボードを初めました。もともとスピードを出すこと、感じるのが好きなので、迷わずアルペンボードを選びました。

ここでスノーボードというスポーツを理解頂くため、簡単に説明します。スノーボードには大きく二種類に分かれます。「フリースタイル」と「アルペン」に分類されます。フリースタイルは飛んだり跳ねたりがしやすいボードであり、ソフトブーツをセットします。今のスノーボードの主流であり、いわゆる「ボーダー」と呼ばれる人々のスポーツです。一方、アルペンはスピードを出しやすいボードであり、スキーブーツのようなブーツを履きます。スキーと同様にGSLやSLの競技もあります。スノーボード界ではマイナーな位置づけにありますが、スピードを出して滑りたい人には、アルペンボードがおすすです。

というわけで、年がいもなくハマってしまいました。毎年十一月くらいから四月頃まで、週末あるいは年休を駆使して、雪を追いかける生活が始まった……はずでしたが、何の因果か労働組合の専従者に選出され山に行けない生活が始まりました。山に行きたいけど、行くことができない。何で「夏の取り組み」にならないのか、真剣に考えたりもしました。フラストレーションが溜まる分、山に行きたくなる。そんな葛藤が二年ばかり続いています。というものの、暇を見つけては（作っては）山に行っています。

今まで打ち込んだスポーツがあまりないだけに、熱い思いがあるかもしれません。元来が飽きっぱ

い私ですが、「行けないからこそ、行きたくなる」つまり簡単には落ちない高嶺の花、といった感じでしょうか。簡単に手に入るものは価値がないかもしれません。これから常に高い目標にチャレンジしていきたいと思います。（スノーボードに行けないことと、高い目標にチャレンジを結び付けたのは、やや強引でしたか）

冬はスノーボードをやっていますが、夏は何をやっているかというところ、サーフィンとウェイクボードをやっています。ただしウェイクボードは最近始めたばかりですし、サーフィンも最近は年に数回しか行かなくなったので趣味といえるほどのものでもありません。が、サーフィンについては先日テレビでS M A Pの木村拓也がサーフィンをやっているのを見て、サーフィンを真剣にやろうかな、と思いました。

姿形、年収は木村拓也に及ばないものの、趣味は一緒だ、どうだ、というくだらない理由です。ちなみに時計は木村拓也がドラマではめていた時計と同じものを持っていました（といってもGショックですが）。

そのGショックは残念ながら九十八年夏に、サーフィンをやっている最中に海に落としました。今ごろ、そのGショックは伊古部（豊橋近辺の海です）の海底で電池の寿命が尽きるのを静かに待っているはずですよ。

ここで私は気づきました。私はどちらかと言うと球技が苦手かもしれない、ということ。小学生の時は野球をやっていたし、中学では軟式テニスをやっていました。また大学ではテニスのサークルに所属していました。しかし球技の苦手意識がどこかにあります。ボールを掴む瞬間が苦手である。

形状が球形の物体は、非常に掴みにくい。私には球形に対するセンスが多分ないのだろうと思います。だからゴルフも苦手（下手）なのだ。

くるま

私の愛車はランドクルーザーです。ランドクルーザーと言っても、80系や100系ではなくH2J77という70系のランクルであります。なぜ77（以下私の愛車を77と省略）を選んだのかですが、愛くるしい丸いヘッドライトと、少々のことではへこたれない頑丈なマッシブなボディに理由があります。

77には、今の車には無い点（どちらかと言うと不便な点ですが）がたくさんあります。まず電装が24ボルトです。4.2リッターを点火プラグなしで始動させるためには、電圧が必要なこともわかりますが、ヘッドライトなど球切れの際、簡単には手に入らないことがあります。今どき、前後四つのサスペンションは板バネです。乗り心地の悪さ、と言ったら、私でも二日酔いの朝など乗りたくないほどです。環境問題がクローズアップされる今、ディーゼルエンジンはやや肩身がせまい思いをします。車のデカさも問題があります。立体駐車場には、まず入れません。パーキングチケットの路上駐車も、取り回しの悪さから、苦勞することしきりです。

しかし、これら不便な点も全てオフロード走行に重点が置かれているからです。オフロードに一度入れば、この不便な77も獣と化します。乗り心地の悪いサスペンションも、猫の様にしなやかに路面のギャップをはいます。環境にあまり良くないディーゼルエンジンは、トルクの太さにつながり、

急斜面を掛け登り、じわりと舞い降ります。古臭い四角いボディも見切りの良さにつながり、オフロードでは天下一品であります。

とは言うものの、舗装されていない道を探すことのほうが難しい私の生活環境で、77の得意とするステージはあまりありません。オフロードも年に数回しか走りません。77の利点を生かしているのは、しいて言えば、雪山へのトランスポーターの役割だけででしょうか。

毎年の車検が近づく度、77の乗り換えを考えます。また、車とはどの目的で所有すべきかも考えます。A地点からB地点までの移動のためでしたら雨露しのげれば何でもよい、と思いますが、移動プラス α があるはずで、 α には人それぞれの価値感があるはずで、高級感を求めるか、走行性能を求めるか、色々ありますが、私はオフロード走行を当てはめました。

車に接している時間の内、数パーセントの時間しか77の性能を発揮できませんが、せっかく自分で選んだ車です。当分は77と付き合っていこうと考えています。

古臭い77も九十九年夏のマイナーチェンジでフロントサスペンションがコイルに変更されるという噂を聞きました。ならば余計に板バネの77と付き合っていきたいと思うのは、私の頑固な性格のせいでしょうか。

最後に

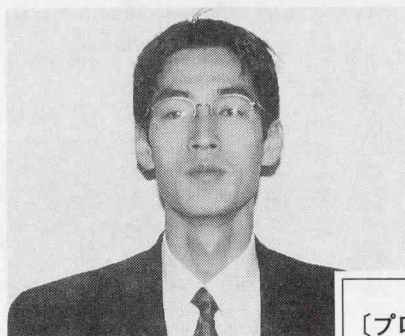
もっと色々なことが書きたかった。スノーボードにしても「マック遠藤」氏（アルペンボーダーの教祖的存在）のこととか、ランクルにしても低速時のトルクを更に生かすにはファイナルギアの変更とか、タイヤはやっぱスワンパーだよね、とか、マニアックな事にも触れたかった。また、私の労

働組合でのテーマである「ホワイトカラーの生産性」について今の段階での私の意見を述べる（人様に言えるほど意見がまとまっていないが）とかあったかもしれないが、結局は書きやすい、私にとつて無難なところに落ち着いてしまいました。

この卒業論文を書いてみて、私の価値観を延々と綴り、ちつとも「殻から抜けだしていない」私に気づきました。

最後に「殻から抜け出す」ために、人の話を良く聞き、実体験も増やしたい、と決意することで締めくくります。

私の友人・先生・上司



全トヨタ労働組合連合会

宇 野 庄 市

〔プロフィール〕

うの　しょういち（32歳）

- ・ 1966年 9 月　愛知県一宮市にて生まれる。
- ・ 1990年 4 月　（株）東海理化電機製作所入社
人事部配属
- ・ 1996年 9 月　全トヨタ労働組合連合会
現在に至る。

〈家族〉　妻・長男の3人家族

〈趣味〉　スキー・スノーボード

（組合にきて、めっきり行く回数が減った）

幼少時代

私は、付属の小中学校、高校、大学もない地元の名門？ 私立幼稚園に通っていた。何故、保育園でなく、名門？ 私立幼稚園に通ったのかというと、もちろん私がお金持ちのお坊ちゃんであったから・・という訳ではなく、単に私の親が保育園へ申し込むことを忘れていたために、やむをえずそれからでも入園できる私立幼稚園に通園したのであった。（この親にして、この子あり）

幼稚園時代の記憶は、既にセピア色を通り過ぎ、A Vのモザイクのようである。このモザイクの記憶をたどると、大人びた伴君の顔がよみがえってきた。伴君とは、卒園後の付き合いは一切なく、幼稚園児の彼しか知らないが、よみがえる彼の顔は何故か「おっさん」である。

今振り返ると、幼稚園児の社会というのは、サル社会に似ていた。私のクラスには三木君というボスザルがいて、そのボスザルのご機嫌を伺いながら、絶妙なバランスで園児の和が保たれていた。通常のサルの社会には、このボスザルに素直に従うサル、虎視眈々とボスザルの座を狙うサル、そして一匹狼のように群れから少し距離をおくサルが存在する。おっさん顔の伴君は、サルの社会で言うところの一匹狼タイプの少年であった。私は、こんな伴君がとても好きで、いつも群れから離れている（決して友達がいけない少年ではなく、それなりの影響力を持っていた）伴君に擦り寄って行ったものである。その一方で、ボスザルの三木君にも適当におべっかを使い、いじめられない程度にお付き合いをさせて頂いていた。

今この幼稚園時代の私の行動を考えると、幼稚園社会で絶対的な権力を持ち、自由勝手に振る舞う

ボスザル三木君と付き合いたくない、ご機嫌取りをしたくないという気持ちを持ちながら、保身のために適当にうまくやっていている自分と比較し、そうしたボスザルの権力を無視し、悠然と三菱トラックの絵を描いている（彼は何故かトラックが好きであった）一匹狼伴君の姿に、私の理想の姿を重ねあわせていたように思う。そんな自分の理想の姿を持つ伴君に対し、彼は大人だったな—という私の勝手な記憶により、思い出す彼の顔は「おっさん顔」になってしまふのである。（これは伴君に対する誉め言葉です）

少年時代（小・中学校編）

私が通った中学校は、小学校から全員同じ中学校に持ち上がるため、中学時代の友人は、小学校時代の友人と同じとすることになる。九年間を共にした友人の中で、誰のことを書くかと考えていたら、意外な友人の顔が思い浮かんだ。

思い浮かんだのは、一番仲の良かった友人でも、野球部で苦楽を共にしたチームメイトでもなく、学年一の秀才、大橋君である。彼とは、九年間のうちに数年は同じクラスになったと思うが、堂々と友人と呼べるほど仲が良かった訳ではない。（仲が悪かった訳でもない）どうして、思い出したかと言うと、卒業後の彼が私に取って印象的であつたからだ。

彼は、確かに勉強が出来、中学一年―二年までは、殆ど学年一番であつた。しかし、私は、自らの成績を棚どころか空のかなた「成層圏に置き」、いつも、がむしやらに勉強していた彼の姿を見て、彼は努力の人であり、そのうち成績も下がってくるだろうと思っていた。事実、三年生となり、殆ど

の生徒が受験勉強を始める二・三学期には、一番をとることが少なくなっていた。(但し、私の成績とは北極と南極ほどに離れていた)ところが、私の恐れ知らずな「大橋君評」は見事に外れ、高校を卒業する頃、彼は現役で京都大学に合格したということを風の便りで知った。

また、彼は、勉強もがむしゃらだが、運動もがむしゃらで、そのがむしゃらさが物を言う「長距離走」がそこそこ速かった。しかし、勉強のように学年トップという訳にはいかず、手足の指で数えられるくらいの速さであつた。「がむしゃら」「必死」という言葉は全く無縁であつた私から見ると、「なんでそんなにまじめに走るんだろう?」という疑問の対象でしかなかった。ところが、中学卒業後、勉強同様にこの「長距離走」でも、大橋君は私を驚かせてくれた。彼は、高校で陸上部に入り、長距離ランナーとして中日新聞のスポーツ欄と尾張版に名前が載っていたのである。愛知・岐阜では有名な名岐駅伝で活躍していたのであつた。彼の高校は、公立高校としては最高位で、彼のタイムも区間新とまではいかないものの、私立高校のランナーに引けをとらないタイムであつた。

自慢ではないが、小学生四年生の頃は、理科や社会では私と彼の成績はそれほど大差はなかつたのである。長距離走でも、真剣に走つた時は「がむしゃら」「必死」という言葉とは無縁の私の方が速かつたのである。しかし、何事にもがむしゃらに努力する大橋君と私には、たった数年で埋めようもない大きな差ができたのであつた。

確かに大橋君は元々頭も良かったし、走るのもそこそこ速かつた。しかし、彼が勉強にしろ、長距離走にしろ、素晴らしい結果に至つたのは、元々の能力や才能よりも、彼のひたむきな努力すると言ふことにより可能になつたのではないかと思う。彼のことを思い出すと、コツコツ努力するといふこ

と自体が才能であり、その才能が私には欠けているということを今でも痛感する。小中学校当時は、憧れるどころか、「ダサイ」（死語）とおもっていた、コツコツと努力する才能の大切さを教えてくれたのが大橋君だった。（しかし、未だにキリギリスのような性格は直らない）

少年時代（高校編）

高校時代は私にとって、最も思い出深く、楽しかった時代の一つである。今でも付き合っている友人も多く、また、個性的な友人や先生が多い。それ故、出来るだけ多くの友人について少しずつコメントしたい。（殆ど、素人がテレビに出て〇〇と〇〇見てる？とやるあの乗り）

まず、水野。彼は、自らバレー馬鹿というくらい、バレーボールをしている時は自信に満ち溢れ、男らしい奴であつたが、それ以外では、にやにやしている上に優柔不断で主体性のない奴であつた。しかし、大学受験等の節目節目だけは何故かしっかり決断し、今では地方上級公務員で岐阜県庁に勤めている。公務員嫌いの私にとって、日本で唯一の公務員の友人である。（遅刻常習犯の彼にとって県庁は、クビにならない最適な職場である）

次に、捕らえどころのない卓哉。彼は、独特の風貌と話し方で周囲を不思議な空気で包む。良く言えば、リラックスした雰囲気をつくる達人。悪く言うとうと、やる気を奪い取る達人である。しかし、実は以外に頭も良く、運動神経も良い。奴の出す不思議な空気で、周りの人間を油断をさせておいて、自分だけは何事もススイと乗り切ってしまう、特撮映画の怪獣のような奴である。

まじめだけが取り柄なくせに、普通の仕事、人生は嫌だと高校時代から言い続け、大学生になつて

から家出少年となつた秀治。彼と私は同じ野球部のチームメイトであつたが、体育会系の乗りになじめなかつた私にとって（体育会系というのは中に入ると、意外に陰湿で、女々しい世界である）、部活動以外で付き合いのある唯一のチームメイトであつた。彼は、何事にも真剣で、特に人の色恋沙汰にはお見合いばあ顔負けであつた。彼のこの真剣さは、周囲の全ての人に不思議な安心感を与えていた。今思うと、都会の生活に疲れた時に見る、はなを垂らし、ホッペを真つ赤にした田舎の純朴な少年のような存在であつた。

そして、今では同じ屋根の下に住む西村。（単に同じ賃貸アパートに住んでいるだけ）今ではさすがに落ち着いているが、高校時代はちゃらちゃらして、落着かない奴というのが第一印象であり、一面は本当にそういう人間であつた。しかし、何故か周りの人間から慕われていた。少ししか西村を知らない人は、第一印象通りの印象を持ったままとなつてしまふが、その一線を超えると、周りの人間にひどいことをいいながら、常に気配りしていることに気づく。こうした性格から、今では第一線の営業マンとして活躍しており、周りの人間の殆どが、彼は社交的で日頃の態度から悩んだり、滅入つたりするような奴ではないと思つてゐる。しかし、実は気配りしすぎて、神経性の胃痛に悩やみ、ひどいときには吐いてしまうことを私は知つてゐる。このギャップが奴のたまらない魅力である。

その他にも、高校時代にストリップ劇場のナマ板ショーで童貞を失つた〇〇（これは彼の名誉のため匿名）。学校から三百メートルの近さに住みながら、毎日遅刻の藤田。私の方言を執拗に注意し続けた後藤。あげだしたらきりが無い。更に先生も個性的で、「肉体的不倫はしていませんが、心理的不倫は常に行っています」と明言する五十歳を超えた危ない古典教師（女生徒は、おちおち授業も受け

ていられない)。僕はボーナスが出たら、直ちに全額引き出し、家に帰り妻と二人で一万円札を撒き散らすのが恒例ですと嬉しそうに語る国語教師。「ガーとやる」と気合で微分積分の問題を解かせようとする数学教師などなど。

文章にすると対して個性的に思えないかもしれないが、高校時代は、個性的な友人・先生に囲まれていたため、自分自身も伸び伸びと学生生活を送ることができた。このことが、高校時代を良い思い出にしている。

青年時代（社会人編）

高校を卒業し、一応大学と名のつく学校に進学した私は、時間について贅沢の限りを尽くした生活を送り、見事にグータラ人間となった後、社会という大海に船出することになった。一応、就職活動らしきもの（バブル入社である私の就職活動はいいかげんなものであった）を行い、東海理化という企業に入社した。

入社後、多くの人と接し、多くのことを学んだが、スルメのように、徐々に重みを増している教えがある。それは、入社して最初の直属上司であり、五年あまり一緒に仕事をさせて頂いた、山本さんの口癖「部下に嫌われたら仕事はできん」という教えである。

これまで後輩はいたが、部下を持つことはなかった私であるが、仕事をこなせばこなすほど（やつければやつつけるほど）山本さんの口癖を思い出す。

少し自分なりに解釈を広げ、「一緒に仕事をする人に嫌われたら仕事ができない」という気持ちを

持つことの大切さを痛感する。特に、二年半前に組合役員になって以来、仕事はひとりではできない、周りの人と、本音の議論をし、その上で信頼関係を築いて仕事を進めないと、本当に良い仕事はできないと痛感している。

こうしたことを考えると、照れながら「部下に嫌われたら仕事はできん。仕事をするのは部下だ。」と話している山本さんの顔が思い浮かぶ。（今では山本さんも私も、東海理化を離れて仕事をしているため2年以上会っていない）口だけでなく本当にこうした考えで部下に接し、自由に仕事をさせて頂ける上司に恵まれ、右も左も分からない新入社員時代から、のびのびと仕事をさせて頂いた。自身で成長したかどうかは分からないが、究極の人材育成でもあるように思う。

さいごに

ここまで読んで頂いた、現在の職場の同僚・上司の皆さんは、「次は俺か」と期待？された方もいるかもしれないが、これからも引き続き一緒に仕事をしていく上で障害？になってもいけないので、現在の友人・同僚・上司については割愛させて頂く。

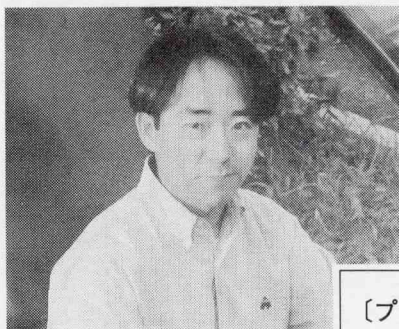
今回、参加させて頂いた産政塾のテーマは「殻を破ろう？（こんな感じだったと思う）」であった。産政塾に参加することを通じて、塾生の皆さんや、講師の方々と接し、それぞれの人の殻というものがあるように感じた。しかし、その殻は、私のせまっ苦しい殻と違い、快適で強固な殻であった。また、ちゃんと出口がついていて、必要なときには殻の外に自由に出入れる便利な殻のようにも感じた。

殻を良い意味で捉えれば、自分を確立するということになると思うが、この殻を、より広く・快適なものとするためには、多くの人と接し、己を知る（自分の殻を知る）ことが必要だと思う。今の私の殻を築き上げたベースは、間違いなく、ここまでだったらと書いた「友人・先生・上司そして家族」と過ごした時間であり、経験である。幸いなことにこれまでは、色々な殻を持った素晴らしい人々と接し、自分なりの殻を造ってきた。伴君には、「周りに流されない殻」、「大橋君には、自分でやりたいこと、やらなくてはならないこと決め、がむしゃらに努力する殻」、高校時代の友人・先生には「それぞれの個性的な殻」、山本さんには、「周りの人間を信頼し、任せ、一つの仕事を成し遂げる殻」、いろんな殻を見ながら自分の殻を作り上げてきた。今後も、人とのつながりを大切にし、新たな出会いに期待して、自分の殻を良いモノにしていきたい。

さらに、殻の中にばかりいては、本当の自分の殻が分からなくなってしまうので、殻には出口をつくり、時には殻の外へ散歩に出かけたいと思います。今回の産政塾では、養護施設の祖父江園長やシャンソン歌手の石原さんなどと接し、遠くまで散歩できたように感じる。是非、今後は自らが意識し、日常と違った経験や人とのつながりも求めていきたいと思っています。

最後に、産政塾でお世話になった皆様に感謝を申しあげ、ペンを置かせて頂きます。

趣味は「クルマ」



豊田合成株式会社

人事部人材開発室

江口 淳

〔プロフィール〕

えぐち じゅん (33歳)

- ・ 1965年 愛知県生まれ
- ・ 1987年 豊田合成 入社
総務部配属
- ・ 1992年 人事部に異動
現在に至る

〈家族〉 妻、長男（3歳）

〈趣味〉 本文をご参照ください

この原稿をお読みの皆さんは、どんな趣味をお持ちですか？

ゴルフ？ 私たちサラリーマンにとつては必要不可欠な、趣味と実益を兼ねた大変よい趣味だと思います。読書？ 幅広い知識が身につくし、何より人生を豊かにする大変よい趣味だと思います。クラシック鑑賞？ これまた高尚で特に年長者の方との会話において、同じ趣味を持つことが判ったときは、そこから先のあなたの評価が急上昇する確率が非常に高い、大変よい趣味だと思います。パチンコ？ 私はほとんどやったことがないので、よく判りませんが、人生の喜怒哀楽が手近に味わえる大変よい趣味だと聞いています。風俗？ 男性サラリーマンだけが集まったときの話題としては、世代を超えて最高に盛り上がりますね！ 大変よい趣味だと……おっと、これについては、必ずしもそうは言えませんね。

さて、私の趣味ですが、最後の一つを含めて（本当です）、このうちのどれでもありません。タイトルを見ていただければ判るように、私の趣味は「クルマ」です。「クルマ」が私にとって唯一の大切な趣味なのです。

と言つてはみたのですが、実は、特にここ数年、今の自分の年齢や、実現しようと思えば実現できることの範囲を考えると、現在のクルマに対する関わり方が、果たして「私の趣味はクルマです。」と言ひ切れるほどのものであるのか、少し自信を無くしているのが正直なところです。今回の原稿では、そのことについて書いてみたいと思います。

まず、始めに私がどんなふうにクルマが好きかを説明したいと思います。

一口に「趣味がクルマ」と言っても、いろいろなパターンがあります。ダッシュボードに絨毯を張ったハイソカーで彼女とドライブをすることが好きな人（そんな人はとつくの昔に滅びているかも知れませんが）も「俺の趣味イー？　クルマァー。」というでしょうし、都内の閑静な住宅街に、一見、小さな美術館かと思うような建物を所有し、その内部の二十四時間空調が効いた広いスペースに、世界に数台しかないクラシックフェラーリばかりを十七台保管しているような人も「まあ、趣味というほどではありませんが、古いクルマを何台か所有しています。」とおっしゃることでしょう。

それでは、私はどんなタイプのクルマ好きかと言いますと、最近の言葉で言えば「エンスー」と呼ばれるタイプに当たります。

「エンスー」という言葉は、初めて目にされる方がほとんどだと思いますので、簡単に説明しますと、これは英語の *enthusiast*（≡熱心家、熱狂者）を略したもので、バブル期に「マル金・マルビ」という言葉を流行させた渡辺和博が最初に使い始めたものです。今では、自動車雑誌では、かなり広く使われている言葉です。正確な定義は見たことがありませんので、感覚的な説明になりますが、「特定の種類のクルマ（例えば、ビンテージカーとか、イタ車とか、アメ車とか）に、ものすごく熱を上げている人」あるいは、「クルマがものすごく好きで、ものすごく詳しい人」ということになると思います。

余談ですが、これまで、世間では、クルマがものすごく好きな人のことを、「カーキチ」（語感がいかにも古臭い）とか、「カーマニア」（マニアという言葉に一種のあやしさが感じられる）とか、ひど

い場合は、「自動車オタク」とか呼んできたわけですが、いずれの言い方も、特にエンスー的クルマ好きの人にとっては、大変違和感を覚えるものであったと思います。その点「エンスー」は、言われる側の心をくすぐる実によい言葉だと思えますので、皆さんもぜひ「エンスー」という言い方を広めて下さい。

閑話休題、私をこの定義に当てはめて考えると、後者に当たります。クルマのことであれば、たいていの分野で、「私はクルマが好きです。」という人よりも、詳しい自信があります。特に、八十年頃以降の欧州車のこと（各メイクのモデルの変遷、モデルチェンジの経緯、主要モデルの特徴等）と七十六年以降のFーレースのこと（マシン、ドライバー、その年がどんなシーズンであったか等）であれば、相当詳しいと言えるだけの自信があります。というのも、私は小学校五年生以来、何度か種類は変わりましたが、毎月必ず、自動車雑誌を購読し、かつ熟読することを続けてきており、そのことによる二十二年間の知識の蓄積は、まさに継続は力なりで、かなりの量に達していると自負しているからです。

さて、私がどんなタイプのクルマ好きかということは、理解いただけたと思いますので、次に、現在の私が、クルマ趣味として現在進行形でやっていることを書きたいと思います。

まず、ひとつめは、自動車に関する新たな知識を習得する、もつと正確に言えば自動車雑誌を読む、と言うことです。何だそれは？　と思われるかもしれませんが、毎月、購読している自動車雑誌を発売日に会社の帰りに購入し、夕食を食べるのもそこに、ページをめくることは、私にとっては、無類の楽しみです。

私が購読しているのは、数ある自動車雑誌の中でも、特にエンスー度が高いとされている、「カーグラフィック（CG）」と「NAVI」という雑誌です。特にCGは、その格式、内容、自動車業界への影響力の大きさから言って、日本の自動車雑誌の王様とも言える存在です。記事の内容は非常に趣味性が高く、最新号の目次を見ても、「フェラーリ その新たな伝説 モンテゼモロー社長独占インタビュー」とか、「ラグナセカに集まったポルシェの名作」とか、全く実用向けでない、そんな記事が中心を占めています。

また、F-1シーズン中は、世界中どここの国でレースがあっても、決勝日の五日後には発行されるF-1速報誌を読んで、テレビ観戦だけでは判らないレースの流れや、マシンの開発状況、ドライバーの近況に関する情報を知ること、欠かせない楽しみになっています。

ふたつめは、同じエンスー仲間とクルマの話をすることです。再び、何だそれは？ と思われるかもしれませんが、こうした時間も私にとっては大変楽しく、このことを通じて、日頃のクルマ好きとしての欲求のかんりの部分が満たされています。

最も身近な相手としては、会社の一年先輩のKさん（彼もちろんCGの読者です）がおり、毎日ではありませんが、昼の短い休憩時間に彼とクルマの話をすることは、有効な気分転換にもなっています。話の内容はといいますと「アルファのチェントロステイルのワルター・デ・シルヴァがセアトに移ったけど、ピエヒはほんとにすごいですね。」とか、「日本GPでのフェラーリF300のフロント翼端板のデザインは、いかにもロリー・バーンらしい形だ。」とかいうもので、一緒に昼食を食べている人達からは、とうの昔に「何を話しているかさっぱりわからん。」とあきれられています。

と、以上書いてきたことを読んでいただければ、私が相当なクルマ好きであることは、理解いただけだと思います。

このことを前提として、冒頭に書いた「クルマが趣味と言いきれるか」ということを考えますと、現在、私がしていることは、果たして人から見て趣味と認知してもらええる内容と言えるでしょうか。もちろん、自分の趣味ですから、人からどう思われようと勝手なわけですが、世の中には、意外と自分の趣味をアピールしなければならぬ状況が多くあり、唯一の趣味が「クルマ」である私にとつては、このことは由々しき問題なのです。人から（特に目上の方から）「クルマが趣味と言われましたが、もう少し具体的に教えてください。」と聞かれて、「自動車雑誌を読んだり、F-1中継を見たりしています。」では、あまりにも、間抜けだと思いませんか。この点が、私の悩みなのです。

ただ、一方で、ならばどうすれば、自信を持って言い切れるようになるか、ということについても、自分なりのイメージは持っています。すなわち、雑誌を読んで知識を増やすだけでなく、もっと積極的にクルマと関わること、それも、毎週洗車するとか、タイヤを太いのに替えるとか、そういうことではなくて、もっとエンスー的な関わり方、言い換えれば、ある程度、日常生活を犠牲にするような関わり方をすれば、誰からも文句なく趣味として認識してもらえようになるだろう、ということです。三十代前半の男性として、自信を持って「クルマが趣味」と言い切るためには、そのくらいのレベルで取り組むことが必要だ、とここ数年、頭の中では思っています。

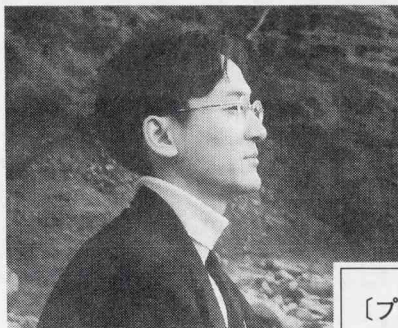
例えば「六十年代の古いスポーツカーを買って、休日のたびに自分でレストアし、三年掛かりで、コンクールコンディションに仕上げる」とか、「会社を1年間休んで、F-1シリーズを追いかけて

世界各国で行われるレースを全て観戦する」とか、「たまたま中古車屋で見かけた、二度と出会うことがないと思われる程度極上のフェラーリを買うために、後先を考えずに多額の借金をする」とか、そんなことをすれば、誰からも、間違いなく「あの人の趣味はクルマだ」と言ってもらえるようになるはずです。

実は、私も「エンスー」のひとりとして、本当は、そういうことがしたいのです。

しかし、現実には、分別のあるサラリーマンとしての殻を破らない限り、こうした世界は、なかなか踏み込める領域ではありません。したがって、何となくもやもやしながら、また、くよくよしながら、毎月雑誌を読むだけの状況が続いているわけですが、たかが趣味ひとつとっても、いろいろ考えてしまい、本当に自分のしたいことを実現できず、また、実現する方法を考えるわけでもない、今の自分のままで、どんどん年を取っていくことだけは、何としても避けなければならない、と漠然と考えているのが、現在の私なのです。

タイムイズマネー (時は金なり)



中部電力株式会社 人事部

見 城 篤

〔プロフィール〕

けんじょう あつし (30歳)

- ・ 1968年 11月14日 静岡県静岡市生まれ
- ・ 1991年 中部電力株式会社に入社
名古屋支店港営業所
- ・ 1993年 飯田支店用地課
- ・ 1996年 人事部労務課
- ・ 1997年 人事部給与・厚生グループ
現在に至る

〈家族〉 妻、長男（0歳）

〈趣味〉 120を切れないゴルフ

一、時間について

「時は金なり」という諺があります。この言葉は、時間というものがお金と同じように貴重なものであることを意味しており、時間を浪費する人間に対する警鐘の意味があるのです。

我々サラリーマンを例にとつてみると、一日二十四時間は、「労働時間」＋「自分の時間」ということができます。そこでは「時間＝金」という式はある一面で、確かに成立します。サラリーマンは、企業（使用者）に「自分の時間」を労働力という形で提供をし、その対価として賃金を受け取っているからです。つまり、時間を浪費する事（働かない事）は、お金を浪費する事（対価を受ける機会を無くしてしまう事）ことに等しいといえるでしょう。

しかし、お金に替わる時間（労働時間）だけが貴重であるならば、労働時間の全く無い人々は、時間の浪費をしているだけでありましょうか。いえ、決してそのようなことはありません。なぜなら、人間は誰でも健康で文化的な生活を望み、その手段として働き、それによって得た対価で「自分の時間」を有意義なものにしようとしているからです。

そのように考えてみると、時間という概念にはお金に換算できる部分と、お金に換算できない部分があることになります。お金に換算できる部分が多い人が幸せであるとか、お金に換算できない部分が多い人が幸せである、ということは残業続きのサラリーマンや時間をもてあそんでいる定年退職者の例をみてみると単純には言えないでしょう。

大切なのは、「労働時間」と「自分の時間」がちょうど良いバランスで保たれていることなのです。

一方、そのような時間は物理的に長ければ長いほど幸せなのでしょうか。

人生の始まりは絶対的なものでありますが、終わりは人それぞれです。生きた時間が長い人が幸せな人、短い人は不幸な人と簡単に片づけられそうにありません。

もし、寿命の長さで、人の幸福の尺度が決まるとしたならば、長寿日本一あるいは世界一の人がこの世で一番幸福であるということになるからです。

「人生太く短く」ということばがありますが、結局、時間Ⅱ量（どれだけ長く生きたか）ではなく、時間Ⅱ質（どれだけより良く生きたか）であるということなのでしょう。全ての人に平等に与えられている「生きる」というチャンスをいかに活かすかが問題なのです。

そのようなことをいうと、「若くして不幸に亡くなった人は違うのではないか」という反論があるかと思えます。ところが、仮に人生六十年生きた人と十年生きた人との間でその人生の価値は、果たして違ってくるのでしょうか。「人の命は地球より重い」ということばがありますが、それが真実であるとしたら、その物理的時間の長短はその質（どれだけより良く生きたか）とは全く関係のない話なのです。

二、働くということ

現在、私を含め、多くのサラリーマンが、一日二十四時間の三分の一から三分の二を労働時間に費やしています。「働く」ということには、様々の目的があります。「自己を向上させる」、「家族を養う」、

「余暇を楽しむ」などです。

ところで、人間とは本来「ナマケモノ」の性格を持った生き物であると思うのです。人間が作り出した数多くの発明品を見れば、いかに楽をして快楽を得ようかという発想にたっているのが分かります。その「ナマケモノ」の性格を持った人間が、「自分の時間」を削ってまで、労働することはやはり「頑張った人はいつの日か楽をできる」という幻想に取りつかれているからなのでしょう。

しかし結果的には、楽をできるどころか、日々の労働の苦痛に苛まれ、休日になつていざ「自分の時間」「家族との時間」を過ごそうと思つても、そのような体力、気力は残つておらず、日曜日の夕方近くになると、妙に憂鬱になつてしまうのが現代のサラリーマンの大半が思っていることではないでしょうか。

「人よりいい暮らしがしたい」「楽をして一生遊んで暮らしたい」。だから、今我慢しているのだ、というような生き方では、いつまでたつても、本当の意味での「自分の時間」を過ごすことはできないと思います。限られた寿命の中、必要なのは、「今」を生きることなのです。誰も明日の自分がこの世に存在することを保証してくれはしません。

三、未開社会の豊かさ

これまで、未開人というと、一日中獣を追いかけて、木の実や草の根を探して、草原やジャングルをさまよい歩き、食物にありつけなければ三日でも四日でもなにも食わずに過ごすと思像されてきました。

しかし、一九六〇年代になって、「技術的、経済的に水準の低い社会にあって、農業を全く知らない人や、農業を知っていてもそれに目をむけずに狩猟や採集のみによって、生活を営んでいる人たちが、自分たちのあらゆる欲求を満たすために、極めて短い労働時間しか必要としない事実」が明るみになってきました。

彼ら未開人は、一日四時間以下の労働で、いわゆる先進国の一日に摂取する栄養と同程度があるいはそれ以上を得ているということです。

「自分の時間」が真の富、真の豊かさであるとしたならば、生産能力が彼らのそれに比べて何十倍、何百倍になった我々現代人は、未開の人々より、貧しい生活をしていることになります。

現代の我々の生活は、確かに大量生産Ⅱ大量消費社会で造られるモノにより囲まれ、一見、豊かなように見えます。

ところが、我々消費者は、テレビや新聞などのマスコミに毎日のように欲望を煽られ、飽くなき欲望により心が落ち着かず、心の豊かさが失われているように思えます。

例えば、新製品のあるモノを購入するとします。それを購入するまでは、いろいろなカタログや雑誌を見て、あれこれと思い悩みます。この、モノを購入するまでの時間は想像力を掻きたて、とても有意義で楽しい時間であると思います。

しかしながら、いざそのモノを手に入れてしまう（欲望を満たしてしまう）と途端に、得も言われぬ不満が沸々と沸いてくるのです。これは、そのモノを選択してしまったことにより他の選択肢の排

除をしなければならぬことに対する寂寥感と、新製品がいつまでも新製品でないことに対する絶望感からくるものです。

心の充足感をモノに求めることは、現代のような物質社会においては非常に空しく、悲しいことなのです。

つまり、現代の社会は、人間を不幸にするモノを大量に生産し、その生産のための労働時間を人間から搾取し、そこで働く人々をよりいつそう不幸にしているという悪循環に陥っているのです。

「幸せになりたい」という思いから、寝る間を惜しんで働いた結果が、逆に人間を不幸にしている現実をみると、まさに手段（労働時間）と目的（自分の時間）が、入れ替わり、自分の時間を削るという手段を用いて、労働時間を増やすという目的を遂行しているかのようです。

手段と目的が、入れ替わってしまうことは日常生活においてもよくあることです。そのことに気付くことができるのは幸せですが、往々にして、人間はそれに気付かずにいることが多いようです。

未開社会の人に話を戻しますと、彼らは、人生を豊かなものとするために、手段としての労働時間なるべく少なくし、必要最小限のものだけ手に入れたら、あとは自由な至福の時間を享受しているのです。

しかしながら、現代の私たちに未開社会の人々のような暮らしをしろと言われても、まず、それは不可能なことでしょう。特に、日本のような、資源の大変少ない国で、そんなのんきなことをしてい

たら、たちまち困窮に陥り、生活ができなくなってしまう。

だから、いま我々が考えなければならないことは、人間に与えられた「時間」は限られたものであるということを再認識し、「時間」をいかに浪費せずに、自分の時間に振り分けることができるかなのです。

四、時間を浪費しないために

経済用語に「労働分配率」という言葉があります。これは、企業の生産活動を通じて新たに得られた付加価値をどれだけ労働者に賃金として分配するかという比率のことです。「労働分配率」が高い程、労働者に対して支払われる賃金の原資が多くなり、それだけ労働者の身入りが多くなります。

「自分の時間分配率」という言葉は、私の造語ですが、一日二十四時間という限られた時間の内、どれだけ「自分の時間」に振り分けることができるか、その「自分の時間分配率」が多い人ほど、幸福と考えることができるでしょう。

ある人が、「人間は寝ている間は死んでいるのと同じだ。」と言っていました。仮に、労働時間を減らすことができない状況にいた場合、睡眠時間を減らす必要があります。睡眠時間を減らすことができます、その時間眠っている人に比べて、より多くの自分の時間を享受することができるでしょう。

実は私は最近まで、「一日最低八時間は眠らなければならない」という、迷信にとらわれ、長い間それを実行してきました。そして、八時間睡眠ができなかった翌日は何となく体の調子が悪いという

気持ちにさえなりました。

さて、私はなぜ、「一日最低八時間は眠らなければならない」思ったのでしょうか。それは多分、八時間眠らないと翌日きつと体がだるく、仕事（活動）に支障があると思ひ込んでいたからです。しかし、最近の研究から、睡眠は時間の長さではなく、深さ（質）が重要であることが解つてきました。幸いなことに、今の睡眠時間はだいたい五時間位でなんの支障もなく生活しています。（相変わらず、昼食後に眠気をもよおしてしまいますが）

迷信の呪縛から解き放たれたとき、私は今まで、自分の時間をいかに浪費していたかに気付かされました。労働時間に無駄に時間を浪費させられるのは当然のこと、眠っている間に時間を浪費させられるのはもっと意味の無いことです。

今までの論調は、一日〓労働時間十自分の時間十睡眠時間 という式の中で、なるべく労働時間を減らして、自分の時間を増やすことが大切である、つまり、労働時間は悪以外の何者でもでもないよな言い方をしてきましたが、これはあくまでも「ナマケモノ」の私の私見であります。

当然、労働時間を自分の時間と考える人がいればそれはそれですばらしいことであり、私は、仕事を常に楽しんで行うことのできる人を尊敬します。まさに趣味と実益を兼ねた人ともいえるでしょう。

五、産政塾で出会った人達

産政塾で出会った人達は、私のような平凡なサラリーマンとは違い、それぞれに確固たる人生観を

お持ちで、良い悪いは別にして一種独特のエネルギーを感じました。

彼ら（彼女）達は、時には「労働時間」を「自分の時間」とし、時には「自分の時間」を「労働時間」というように切替をおこなって、「時間」を伸縮自在に操っているように見えました。

私は、人に対して私の経歴はこうでこんなに苦勞したんだとか、成功したんだとかいうことは今の時点では残念ながら言うことができません。

最近、自分の中で思っていた「時間」に対する考え方と産政塾でお会いした方々の生き方を照らし合わせ、残りの人生をいかに生きるべきかを三十歳になった今、改めて考えてみたいと思います。

ターニング・ポイント



丸栄労働組合

榊 原 悦 人

〔プロフィール〕

さかきばら よしひと (33歳)

- ・ 1965年 半田市生まれ
- ・ 1988年 株式会社 丸栄入社
- ・ 1996年 労働組合専従
現在に至る

〈家族〉 独身貴族を謳歌中

〈趣味〉 麻雀、パチンコ、テニス、お酒

人生にはいくつかの転機（ターニング・ポイント）があると思います。人によりその時期・内容は異なると思いますが、一般には「受験・就職・結婚」等が大きな転機となるのではないのでしょうか。人間が生まれてから死ぬまでの間には、数限りない転機を迎え、その度に「選択」という決断を迫られます。これが「ゲーム」であれば、一度試してみても都合が悪ければリセットボタンを押してやりなおせばよいのですが、実際の人生ではそうはいきません。どちらを選択しても結果は同じという事もあるのでしようが、それとしてその過程には違いがあり、人生経験という観点で言えば決して同じ結果とは言えないと思われれます。

有名なシェークスピアの戯曲の中で「生きるべきか死すべきか……」という名文句がありますが、これなど転機における人間の苦悩をもっともよく表現したものの一つと思われれますが、幸い私には「生か死か」といった究極の選択を迫られたことはなく、また多くの方も私と同様であると思います。しかしその程度はともかく、転機を迎えた際には必ずといって苦悩が伴います。恐らく現在では何もなかったような記憶しかなくても、過去の頃を振り返れば、少なくともその当時には「一生を左右する重大事」として、それこそ眠れぬ夜を過ごした方もいるのではないのでしょうか。

「受験・就職・結婚」といった重大事は当然として、我々の生活は常に「選択」の繰り返しであると思われれます。例えば今日は何を着ていこうか、昼食を何にするか、お酒のおつまみは何にしようか等、常に多くの中から一つを選び出すという作業に追われます。一見何も考えていないような事でも、

その決断の背景には経験・趣味指向或いは当日の体調など様々な要素が絡み合っているとあります。結果として何故それを選んだか答えられないことも多いとは思いますが、人生経験（或る意味では選択）を重ねれば重ねるほどそういった決断に思考能力を働かす必要はなくなる、言い換えれば自然に決断ができるようになるのではないのでしょうか。

子供の頃、お小遣いを握り締め、駄菓子屋の前で何を買おうか悩んだ記憶を皆さんお持ちではないでしょうか。衣料や雑貨など、型・色、或いは機能等について、どれを選ぶか迷ったことはないでしょうか。思い返せば、幼少の頃ほどそういった「選択」に時間と学力（思考力）を費やしたように思われます。これは、自分のスタイル或いはフォームといったものが固まらない状態であったからであり、経験（歳）を重ねることにより自然と自分に適した或いは合ったものが何かを特に意識することなく「選択」できるようになると思われます。それこそ、「車」「異性」といった好みが大きく別れるものは、経験を重ねた者だから選ぶことができるものであり、自分のフォームを持たないものであればその度に「選択結果」に違いが出てしまい、結果として最良の「選択」ができないと言えるのではないのでしょうか。

結論的には、我々がよりよい生活を送るためには、最良の選択が必要であり、最良とは言えないまでもベターな選択をするためには、経験を積まないといけないと考えます。一口に経験と言っても、実際に自分が体験（実体験）することもあれば、他者からの伝聞等による疑似体験もあります。このうち疑似体験には、映画・テレビなど視覚的なものもあれば、本のように想像力が必要なものもあ

ります。現在では、視覚的なものにその中心が移行しているように思われ、範囲を拡大すればテレビゲームなどもその例に含まれるかもしれません。本のように想像力が必要なものであれば、個々によりその受け止め方も違い、或る意味では実体験に近いとも思われますが、視覚的なものはどうしてもその受け止め方が画一的になりがちで、結果として誤った「選択」をさせる要因にも成りかねないように思います。その意味で犯罪の低年齢化は、疑似体験が中心で実体験の不足により自分のスタイルが確立できないためであるとも言え、その責任の多くは我々大人にあると考えられます。

では、実体験を増やし、自分のスタイルを確立していくためにはどうすればよいか。答えは簡単です。行動範囲を拡大し、より多くの人間と出会うことだと私は考えます。子供の頃は町内といった狭い行動範囲であったものが、徐々にその範囲は年齢を重ねるごとに広がっていくと思います。行動範囲が広くなるということは、それだけ刺激を受けるということであり、感受性が高まるとも言えます。人間は環境動物とも言われますが、どんな性格の人間であっても、環境が変われば自然にその性格・考え方も変わると思います。それは、自分と価値観の違う人間と接することにより、良い面も悪い面もその影響を受けるということであり、如何に多くのそして優れた人物と接することができるかどうか、その人のその後の人生を左右するとも言えるのではないでしょうか。

一般的には、人と多く出合うことはその人間の幅を広げることになるといった考え方があると思いますが、私はその考え方に対し異を唱えるわけではありません。むしろ、人間の幅を広げるということとは、考え方の許容量が拡大することであり、先の「選択」における基準がより繊細で多種多様なものとなることだと思います。また、人間形成（自己同一性の確立）がなされるということは、この基

準に一つの方角性が確立されることでもあると考えられ、結果としてその基準が多種多様に分化され、且つその方向性が確立されていれば、「選択」の際にあらためて思案する必要性は薄くなることと思っています。

冒頭申し上げた「転機（ターニングポイント）」とは、「選択」の中でも大きな環境変化を伴う「重大な選択」と言い換えることができるかもしれませんが。しかし、所詮は一つの「選択」にしか過ぎず、後で振り返れば何であんなに悩んだのだろうといった過去にしかないはずで、右を選ぶか左を選ぶか、その判断を左右するのは、自らの経験により培われた「知識」でしかありません。理論的に判断する場合もあれば、無意識（特に思案することもなく）の内に判断する場合もあるはずで、現在の会社に就職して以来、私は無意識の内に自らの行動範囲を限定し、また、自らの「選択」の基準に規制を与えてきたように思われます。

今回「産政塾」に参加するという「選択」をし、結果として全てとはいきませんでした。「会」に参加したことにより、自らの行動範囲及び選択の基準に幅をもたせることができたと考えます。私自身けつして社交的な性格とは言えませんが、職業柄人と接することは大好きです。特に自分と違った価値観をもった方々と合いまみえることは、例えばそれが大悪人であろうとも、何事にも変え難いものだと感じます。幸い（？）私は、人生の一番大きな「ターニングポイント」は迎えてはおりません。迎えるかどうかともわかりませんが、その時のためにも、また日常の生活の中でより良い「選択」をしていくためにも、今後より多くの人間と出会い、貴重な経験を積み重ねて行きたいと思っています。

最後に、第九期産政塾のメンバー及び事務局の皆様には、勝手ばかりを述べ、満足に「会」に参加できなかつた自省も含め、感謝を申し上げます。

以上

明日の暮らしを考える



豊田市役所 総務部人事管理課

柴田 徹哉

〔プロフィール〕

しばた てつや (35歳)

- ・1963年 豊田市生まれ
- ・1987年 豊田市役所 入庁
経済部農林課 配属
- ・1992年 社会部交通安全課 配属
- ・1997年 総務部人事管理課 配属
現在に至る

〈家族〉 妻、黒猫

〈趣味〉 ツーリング、休日の昼寝

産政塾に参加して

何のことだかわからずに放り込まれた産政塾だったが、あつという間の9か月が過ぎ、振り返れば一つ一つが貴重な体験だったと思える。各回の企画で出会った人々は決して別世界の住人ではないけれど、産政塾に参加しなければ、その存在さえ意識することもなく過ごしてしまったに違いない。

組織人ではない個性ある人々に会わせていただいた。それぞれ道は違うが、私が感じた彼らの共通点が二つある。

【共通点その一】

やりたくて始めた

やりたいことをやるのは人間の自然な姿だが、…やりたいこと、皆さんやってますか？ 私は「ハイッ」と自信を持って言えません（いいわけはいくらでも言えます）。

【共通点その二】

素直

やりたくて始めた事が仕事になった時、社会の軋轢や、家庭経済との両立等に悩み、選んだ道に疑問を抱いたり、周囲に対する不信感をもったりするのが普通の人ではないだろうか。産政塾で逢った人たちは、好きなことを素直に自分の道と認め、淡々と進んでいるように見えた。その道の選択について無理な理由付けをしていないため、継続もでき、一応の形を成す事ができたのだろうと思う。

私は自分の欲求に素直でありたいと思っているが、行動を決める時に、無意識に「普通の人と同じ選択肢」を選んでいる。自分が幸せになるために何をすればよいのか、もっと真剣に、もっと素直に考えるべきだろう。

こうして見ると「殻の外へ」という塾のスローガンがなかなか含蓄のあるものに思えてくる。

明日の暮らしを考える

暁学園の祖父江氏からは、信じるやり方を実行していくバイタリティーを感じた。石原さんには、好きなことに自然に身を投じる思い切りの大切さを学んだ。角皆氏はカッコよかったし、現代の神話「コニー・ザ・ベック物語」に勇氣と希望を感じた。それぞれに印象深い出会いであったが、「明日の暮らし」を今日のテーマに取り上げた動機には、岡本氏の野外観察道と、湯本氏の設楽農学校とが関係している。

岡本さんに同行したシティーウォッチングで、面白いものが道端にころがっている事に気付いた。新しいものを欲しがらなくても、楽しみのネタは今ここにある（これは前から思っていたが、改めて意識するキッカケになった）。本当に必要なものは、これから開発される新製品ではない。それは、手に届く場所に今あるもので、これまで見過ごしてきたもの、又は見過ごされたあげく、郷愁の世界へと葬り去られたもの達ではないか。

現代人の志向は限りなく利便性、快適性を追求してゆく。この歪んだ価値基準が新しいものを登場させ、その繰り返しによって得られる経済発展を幸福の条件だと思い込んできた。問題はその「新しいもの」が必ずしも本当の豊かさに寄与せず、むしろ弊害を招来している点である。

湯本氏はこの弊害に着目した。それは過度に人為的な手法により作られた食糧が人間の健康に及ぼす障害であり、また我々の経済活動が、より根本的な生存基盤である地球環境を脅かしている事実である。われわれが訪れたときの湯本氏の設楽農学校は、都会暮らしの我々にとっては、いささか清潔感に

欠け、経済的な豊かさを感じさせる内容ではなかった。「理念は立派だが、現実離れしている」というのが、塾生全般の感想だったように思う。しかし、数頭のヤギと少しの山野があれば生きてゆけるという湯本氏の実践は、物の豊かな都会生活を享受する我々にとつて今は飛び込める世界ではなくとも、近い将来にそういう選択を迫られる時期がくるのかも知れない。

いずれにせよ、我々は身の周りの脅威についてもっと勉強し、ぼちぼち真剣に回避行動を起こさなければいけない時期に差しかかっているのではないか。

さて、すでに誰でも分かっていることを、だらだらと稚拙な文章に書き直しても面白くないので、私自身が考える「明日の暮らし」を表にまとめてみた。「幸福への寄与度」を基準にして、身の回りにあるものが「明日の暮らし」に本当に必要なのか、自分の好みで分類しただけである。この作業は結構面白いので、気が向いたらやってみて下さい。

(表参照)

たぐさんの便利快適グッズが、「幸福の阻害要因」に分類されてしまいました。

(一) 携帯電話／午前様で、飲んでいるときに、家からお叱りの電話が入る。また、彼女の家に電話するときの「父親が出たらどうしよう」というドキドキを若者達から永遠に奪った。重罪。

(二) ディスカウントストア／婆さん経営の弱小商店を潰し、値切りの楽しみや婆さんと喋るイライラ体験を主婦から奪った。また、物の安さは人間の幸福とは関係ない。

(三) リニアモーターカー／東京出張大阪出張が日帰りで可能。嫌だ。ホテル従業員も失業する。

…私が考えた明日の暮らしは、現代の文明国の庶民が、極端な苦痛を感じずに済み、また一人一人

!

の人生観や精進に応じて十分に楽しみや充実感を感じられる「あたりまえの暮らし」になった。

昨今の日本を「不況」の一言で片付ける風潮が蔓延しているが、誰の陰謀だろう。一人一台の自動車と通信機器を持ち、若者はレアもののブランド品を買い求め、年末には酒瓶を並べて豪華な忘年会を嫌になるほど（私は嫌にならないが）続けている。「Windows 95を98に買い替える小遣いがない」：それを不況という人がいるのなら、もつとあたりまえ基準を適用するようにみんなを教えてあげなければいけない。（この不況により本当に深刻な状況の人もあるし、日本の国際競争力等の問題もあるが、別の機会に。）

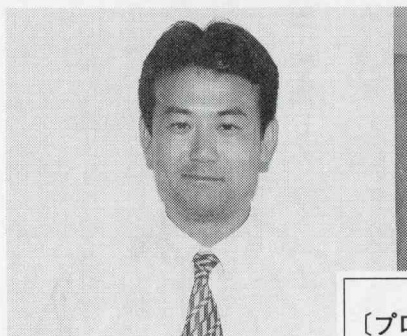
おわりに

産政塾は異業種交流の場であるが、同世代のメンバー、しかも強烈な個性をそれほどあからさまにするような人物がいなかったため、あまり「異」を感じずに居心地よく過ごしてしまった。一番の異業種であった私自身がもつと「異物」に徹すればさらに面白かったのではと、反省もしている。

役所の常識は社会の非常識といわれる。自治体職員はより積極的に他の社会と接し、行政へのニーズを把握しなければならない。異業種交流はそのための主要な手段の一つであり、自治体職員自身にも希望する声が多い。役所周辺で完結しがちな私の生活の中で、このようなチャンスが与えられたことに感謝するとともに、今後さらに広く社会に目を向けるためのきっかけにしたいと思う。

国際化の進展の中で今後我々が歩むべき進路を真摯に示唆してくださった足達塾長、孤軍奮闘で活動の場を設定してくださった優しい丹羽さんに感謝します。九期生の皆様、またお逢いしましょう。

新しい世界で感じていること



全トヨタ労働組合連合会 総合企画室

全トヨタ販売労働組合連合会 教育局

須崎辰彦

〔プロフィール〕

すざき たつひこ (34歳)

- ・ 1964年 9 月 愛知県にて生まれる。
- ・ 1982年 4 月 トヨタ車体(株)入社
- ・ 1996年 9 月 トヨタ車体労働組合
- ・ 1998年 9 月 全トヨタ労連、全トヨタ販労連
へ派遣

一、まえがき

第九期産政塾が終了し、最後に提出すべきレポートが提出期限に対し大幅遅れ。数回にわたり中部産政研の丹羽様から「まだ最後じゃないけど早く提出頼むよ」とやさしくお声をかけて下さったにもかかわらず大変遅くなったことをお詫びいたします。

また、関係者のみなさまにも多大なご迷惑をおかけしたことに對しましても深くお詫び申し上げます。

二、今回の産政塾に参加して

農学校体験、元スキープレーヤーとの懇談会、最終回の足達理事長との懇談会に参加させて頂きました。全メンバーとお会いしていないのは大変残念ではありますが、本当に良かったと思っています。まず、貴重な体験が幾つもできたこと、そしていろいろな方とお話ができ、意見を聞きそれだけでも感謝しておりますし、見聞を広める、情報収集、気分転換といった観点でもかなり私自身にはプラスになったと思っています。

その中で心に残ったキーワードとして下記に記しておきたいと思います。

「間伐体験」「コリーザペックの想い」そして「山羊のミルク」

三、勤続十五年目に来た知らない世界

勤続十五年目のこの秋に職場が変わったのであります。もともとは、トヨタ車体(株)富士松工場の品

質技術員室といったところ（どちらかといえば技術系）で十三年。労働組合に移って二年という経歴であります。

その二年間で労働組合について少しだけ学んだわたしが全トヨタ労連に派遣され、さらにそこから全トヨタ販売労連の方へ派遣されたのであります。いままでの十五年間というものの物作りに携わってきたのですから、この九月からの新車・中古車を売る、車両を整備する方々の労働組合の連合体で仕事をすることとなり、私にとっては別世界へ飛び込んだようなものなのです。

お正月のテレビ番組でやっていた、なんとか族が日本に来て生活してみると言った状態とほとんど同じであり、何も知らない『販売』という世界に、私自身かなりのショックを受けたのであります。

四、ものを売るといふ難しさ

この六ヶ月で感じた『販売』とはまず、『人間』が相手であり、その『人間』に百万円以上はする車を買って頂くということ。

人間という生き物は厄介でそうそう言葉を発しただけじゃ買ってくれないのであります。みなさんどうですか、自分の家に何かを売りに来たセールスマンに対し、どういう想い・気持ちで応待しますか？（しましたか？）お客様の気持ちを掴みさらに動かし、決心させる、といったことを想像して頂ければわかると思いますが、なかなか話しを聞いただけで物を買おうという気にはならないのでは……。物づくりはお客様が気にいってもらせる物を想定し、それを全員でかたちにしていくといった面対人間との交渉のような苦労はあまりないと思います。（全くないことはないけれど）

そんな面が別世界だと感じた大きな理由の一つであります。

五、車を売り続けるために残すべきこと

現在国内で台数が減ってきてはいるものの車が売れている要因はいろいろとあると思います。もちろん、最近トヨタの販売政策が度々新聞記事となりますように、神戸の試乗できるお店とか、各チャネル（トヨタの販売会社ではトヨタ店、カローラ店、トヨペット店、ネット店、ビスタ店の五チャネルがある。）にハブ拠点（お客様に沢山集まってもらえる中心のお店）を設けて、お客様にお店まで足を運んでもらう、運びたくなる場所を提供するといったことも試されていますが、その中の一つとして訪問販売にあったことは間違いない、と私はこの六ヶ月で感じたのであります。

特に都市圏から離れば離れるほどその効果が発揮されるのであります。

販売携わっているある方は言います、「ショールームに来たお客さまの分だけで、今の台数が確保できていると思ったら大間違いだよ、一件一件お客さまの家にいって直接PRすることで、CMがなく知名度もない車が売れるんだよ」。

おっしゃる通りであります。なぜなら、いい車、カッコいい車がすべてではなく、いやユーザーの多くが好んでもらえるスタイルとか、コストの面でもほかの同じような車と比較すれば大差ないと感じるものもあると思いますが、その車を売ってくれているからです。だから、販売政策はどんどん打つ必要があるとは思いますが、訪問販売分野の継続は非常に必要ではないかと思っています。

六、売れる車を作り続けるために

この間全トヨタ販労連のセミナー講師をお願いした経済キャスターの西村晃氏は言っていました。「きれい・こだわり・家庭の3K」が今のユーザーの心を動かすために必要だと。

いろいろあるがすべてお客様の心を掴んだ商品ができるとは限らない、「絶対」はないと思いますが、確かに3Kの中の『こだわり』という視点は人の心呼び起こすのではないかと思います。例えば、地球環境にやさしい、人にやさしいといったことは、まさにそれであると思います。

しかし、この『こだわり』にもいろいろなエキスが必要だと感じています。まず、全体の流れ、流行、全体の動きを掌握していかつ、全く違った視点からの発想、人の逆の発想を持ち、それに『こだわって』いくことが売れることに繋がっていくと思います。

そのために、お客様と接している「売る人」の意見・発想をもっと「作る人」へ伝達するため、話しをする機会を増やすことが今一番必要なことではないかと、思うところであります。

七、これからの自分

今回、全トヨタ販労連に派遣され「売る」ことに関して感じた点について思うままに書かかせて頂きましたが、いろいろご批判もあらうかと思いますがお許しください。

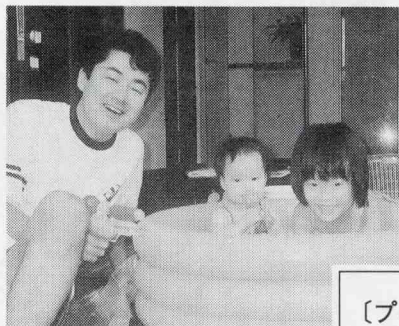
自分自身まだまだ知らないことがいっぱいあると感じており、全トヨタ販労連、全トヨタ労連の役員として、トヨタ車体労組の執行委員として、「売る人」「作る人」それぞれに働くみなさんの気持ちを

大切に考えて役割を果たしていきたいと思うとともに、今の自分より少し『こだわり』を持った人間になっていきたいと思います。

感じることを気ままに…

人生の転機は刺激的

(題名負けですッ!?)



中部電力労働組合本部

玉 木 健 二

〔プロフィール〕

たまき けんじ (34歳)

- ・ 1964年 岐阜県生まれ
- ・ 1983年 中部電力株式会社入社
- ・ 1993年 中電労組岐阜総支部専従執行委員
- ・ 1997年 中電労組本部専従執行委員
現在に至る

〈家族〉 妻、長女、次女の4人家族

〈趣味〉 最近は家族全員で遊べる庭いじり
(ガーデニング?)

今年の八月で、四歳になった上の娘を見ていて感じることを氣ままに：

英語の達人現れる!?

つい二ヶ月ほど前に、東京ディズニーランドへ二泊三日の普通の旅行に連れていった。

一番行きたがっていたのは何を隠そう私自身であったが、何でも十五周年ということで、記念のパレード、ショウも開催され見ごたえは十分であった。

当たり前の話であるが、パレード、ショウで歌われる歌詞は当然イングリッシュ、リズムは楽しめるものの自分が歌えるものではない。

そんな折り、ふと上の娘を見ると、

「うおお 歌っているではないか？」これはどうしたことかと思い耳を澄ましてみると、

「何だ!? 歌詞はめっちゃめっちゃだぞ……だけど自分の知ってる言葉や音で勝手気侭に楽しく歌っている！」

「うーん なかなかやるぞ我が娘は！」と関心したものであった。

彼女は今日も私の車の中でCDにあわせて、大きい声で不思議な英語で歌いつづけるのであった。

そうか！ 英語を早く習得するには単語の意味や文法を覚えることよりも、英語に親しむことだとかという話を本で読んだ記憶があるぞ！

日本語と英語の使い分けてこれぐらいの子供には何にも抵抗ないのかなあ……そうだ、こいつと一緒に「ジスイズアペン」から勉強してみようかなあ……ついていけるかなあ!?

ある日曜日のちょっといい話

「お父さん、今度の日曜日空いてる？」

おっ来たぞ!! このセリフ、さては幼稚園で行事か何かあるな？

案の定、日曜日は彼女の通う幼稚園の作品展であった。

それにしても暇な親が多いものだ、なんで子供の図画（今はこういわないのかなあ？）の作品を見るために弁当もって、家族総出で来るんだろう？ そう思いながらビデオカメラを片手にしつかり参加している私であった。

「お父さんこれ夏ちゃんの作品だよ！」

どれだどれだ、「うおおこれかあ！ さすが親に似て……ところでこれ誰？」すかさず妻が低い声で

「お父さんに決まっているでしょ！」

「えっ!? これが俺……？ でも待て待て、隣近所と比べてみるとどうかなあ？」

これが何と実に彼女の絵はうまいのである（少し鼻眉目だが）。

被写体の選定がいいとは誰も認めないが、画用紙全体に大きくそして、ポイント部分がどの絵にも描かれている。

そういえば最初に鉛筆を握った彼女の手に私の手を添えて広告の裏の白い紙に大きな輪を書いたことがあった。そしたらすぐに彼女は鉛筆がものを書くものだとかわかった。

鉛筆がクレヨンに変わり、点と線が丸に四角に、三角へと、そして顔や花へと進んで今日のこの素

晴らしい作品へとつながったのであった（少しオーバーか!?）。

クレヨンと子供の想像力：想像力とはものの形を思い浮かべる感性であり、子供にとっては幸福の足し算であると聞く。

一本のクレヨンに想像力が加わると世界は一変する。

目頭を熱くし、作品に見とれていると、またまた妻の声、

「この絵の題名『大好きな人』なんだって！ お・と・う・さ・ん!!」

この日の夜、近くのファミレスで気持ちよくハンバーグステーキセットをおごっている私の姿があった。

夏ちゃんの成績表

参議院選挙も終わり、一息したある日、

「最近夏ちゃんどうも反抗的なんだけど」

という相談：またオーバーなんだからお母さんは！　なんて思いながら彼女を見るとまんざら外れていない様子」

「どういう状況なの」

「手がかかる彩果（さやか）（下の娘　ただ今一歳）の相手をするとうすぐ邪魔をするもので、どうしても怒ってまうのよ」

「それで」（少し心配になってくる）

「すると話を聞かず、目を合わせず、ばーかつて言うのよ。その後いくら幼稚園のことや楽しそうなこと聞いても返事もしない」

私といるときにあまり記憶のない彼女の態度：なんだろう原因は？（いろいろ考えた）
帰宅して、彩果を抱くと

「ウーンウーッ」と赤ちゃん言葉で彼女がまわりついてくる。

そうか！ 自分に注目させたい信号なんだ（えらく簡単に結論つけてしまった。）

「夏ちゃん、お父さんの秘密知つとる。お父さんの一番好きなのはね、夏ちゃんと彩ちゃんなんやて」
「どっちが好きなの！」

「それはどっちって言えないよ。だって夏ちゃんの良いところは…」

どんだん彼女の良いことをいっぱい話してあげる。

そんなことを繰り返しているうちに今度は彼女のほうから

「今日夏ちゃんこんなこと頑張ったよ。ねえお母さん」（うん単純な娘でよかった）

「そうか、それはすごい。よし！！ 良いところと頑張るところを成績表にしてみようか」（これには彼女大喜びで、今でも壁に張つてある）

仕事でもそうだ。自分が無視されることは何事よりもつらい。

相手ばかり気に留められたり、自分は叱られてばかりいればとても仕事をやる気になれない。

相手の長所を引き出しながら人を育てていくこと、これは家庭でも仕事でも変わりはないと考えさせられた（ちよつとまじめにまとめてしまった）。

愛の告白！

平成六年八月十四日忘れもしない、そうあれは終戦記念日の一日前……そんなことは関係なく彼女が妻の狭い（結構大きかったが）おなかの中から広い世界へ遊びに来た日である。

妻も彼女も助産婦さんも頑張ったが私も負けじと頑張った。

「ヒッヒッフー ハイ！ ヒッヒッフーウン!!」

前日食べた餃子のおいを（実は妻も食べていた）分娩室に充満させ、手を握り汗を拭き拭き彼女の誕生をひたすら待った。

予定日にピタリ生まれた彼女は、生まれてすぐさま親孝行者と呼ばれていた。

親孝行者の夏実さん、お父さんはこんなに頑張っているのだ、後十年して

「お父さんの下着と絶対一緒に洗わないで」とか

「うちのおやじ超ダサ！」

なんて悲しいこといわないでね。お父さんも頑張るから（急に弱気になっている）。

ところで後二十年もしたら（うん結婚する人決めたらかなあ）、お母さんと彩果には内緒で二人で飲みにいこう。

男坊主だったら、日本酒とエイのひれなんかつまみでいいけど……、そうだね、今大切にしているBarにでもいこうか？

そしてワインで乾杯しよう！

その時に一杯いっぱい話してあげる。あなたが我が家に来ることをどんなにどんなに二人で待ち続けていたのかを、生まれて二ヶ月で大病をしたとき神様に自分の命と交換してほしいとお願いしたなどとなど（後二十年何があるやら）。

その時は少しくどくてもいやがらずに聞くんぞぞ！

その日が来るのを（本当はさみしいけど）ウィスキーでも飲みながらニヤニヤ待つてることとしよう。

「人間が子供から大人になる転機は、成人式でも入社式でもない。子供が産まれたときだ」とある人が言った。

うん、そのとおりだ。

守られる立場から守る立場に身をもつて変わる歴史的瞬間である。

そして家庭という小さな社会の中から、人が生きていくルールを子供（守られる立場）も親（守る立場）も学びあえる機会の始まりでもあるんだ。

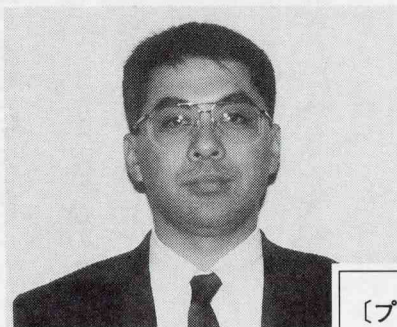
これは、企業でも、大きな社会の中でも何も変わるものではない。

体長一〇〇センチメートル、体重十四キログラムの彼女が、私に投げかけてくれる大切なメッセージをこれからも大切にキャッチしていこう（もう一人もっと小さいのもいるぞ！　がんばらねば!!）。

愛すべき夏実ちゃん、彩果ちゃんそしておまけにお母さん　よろしく頼むぜ！

おしまい

『平和』ってなんだろう



アイシン労働組合

恒 川 智 行

〔プロフィール〕

つねかわ ともゆき (31歳)

- ・ 1967年 愛知県名古屋市生まれ
- ・ 1991年 アイシン精機(株)入社
アパレルシステム部配属
- ・ 1995年 東部営業部ファッションシステム
東部営業所へ配転
- ・ 1996年 労働組合出向
- ・ 1998年 自動車総連派遣
- 〈家族〉 妻
- 〈趣味〉 野外探検
- 〈好きな言葉〉 人事を尽くして天命を待て

一、沖繩に平和はあるのだろうか

オキナワ―本土に復帰して二十六年。県民のために米軍基地の縮小を訴えてきた知事は保守系の候補に敗れたが、争点は経済の再生でいかに景気を回復させる事ができるかであった。沖繩の失業率は日本全体の二倍近く、すでに八%を越えるもので、現職知事は「不況は国の責任」とし、保守系候補は「県政の失敗によるもの」と対立した。自民党本部は最終的にどちらの候補にも肩入れできなかった。

小渕首相は早速就任の前に新知事と会談し、中断していた普天間基地の移転問題の再開を約束した。現在日本に駐留している米軍人は約四万人。そのうち半数の二万人が沖繩にいます。先ごろ行われた県民大集会には五万人の人が集まったが、「私たちに静かな沖繩を返して！」と訴える女子高生の声は今も脳裏に浮かんできく。このところ若い兵士による交通事故・暴行事件が頻発し、それを現行犯以外取り締まれないという現実からも県民の不満は増すばかりだ。

日本に四万人・内沖繩に二万人。これは多いのか少ないのか？

この問いに答えるのはなかなか難しい。アメリカは最近アジアにおける十万人体制を堅持していく方針を改めて確認し、発表した。北朝鮮はテポドンロケットの発射実験にも見られるように今後民主主義の大きな脅威となるということのようだ。そしてオキナワはハワイやグアムに比べて五倍早く北朝鮮に到着できるというのがオキナワ駐留の主な理由としている。その一方で戦闘機あるいは戦艦等で即時出征できる兵士は四千名程度。残りの兵士は出たくても歩いてでは行くことはできない。よって主に教育を受けるといふことになる。しかし駐留の理由はそれだけではない。日本は駐留米軍に

対して「思いやり予算」と称する多額の予算を投入している。これは韓国の比ではなく結局のところアメリカにしてみれば日本に駐留させるのが一番安上がりなのだ。これはアメリカの一方的な一人よがりの横暴なのか？ いずれにせよ沖縄県民にばかり負担を強いてきたのはまぎれもない事実である。

二、戦後五十年、日本で戦争が起きなかったのはなぜ？

私たち日本国民はよく考えなければならないと思う。日本の平和は永久なのか。そしてその平和は何に基づいて成立しているのか。

日本は戦後、過去を反省しアメリカの作った憲法を自国の規律として忠実に守ってきた。だから平和が実現できたのだろうか。

日本は軍隊を持たない。(形の上では)では軍隊を持たないから平和が維持できているのか？ そんな事があるはずはない。それはコトダマの世界で、戦乱の世の安泰を願って書かれた物語を「太平記」と名付けたのと同じである。永世中立国のスイスでさえ、軍隊はある。他国の武力の脅威から身を守るにはそれ以上の武力をもって対抗せねば侵略され属国とされてしまうのは歴史が証明している。では、自衛隊は軍隊か？ 私は今は軍隊ではないと思っている。しかし自衛隊を軍隊と認め、日本を他国からの侵略に対抗できる訓練を行い、常時戦うことのできる体制をつくっておかなければその存在の意味も薄れてしまう。「自衛隊など必要ない」「安保は反対・自衛隊は憲法違反だ」「日本の軍国化は軍人が暴走したからだ」という人も多いと思う。私はその人達の考えを否定はしないが、もし他の国が日本に侵略してきたら無抵抗に属国となり、奴隷として働く、あるいは殺されても一向に構わない

という心構えでいられる人たちなのだと思うだけである。

私は私自身だけならまだしも大切な家族や友人、そしてなにより日本国民が侵略国の奴隷となるなど耐え難き事態だ。そうなったら命懸けで事にあたる気構えである。しかし長い平和はそういう感覚すらマヒさせてしまうのか。

「日本の平和は永久か」という問いに私ならこう答えるかもしれない。「お金の続く限り……」今の平和はまさにアメリカ軍に護ってもらっているにほかならない。つまり日本はお金でアメリカ軍に駐留してもらい、平和を買っているのだ。そして日本がそのコストを負担しきれなくなったらアメリカ軍はきつと撤退するであろう。そして今後一切日本になにが起こっても関らないという事になる。自衛隊が軍隊の訓練を行っていない以上、江戸時代の幕末の武士がごとく自国を護ることは難しい。日本の行く末は先ほど述べた属国への道である。

三、平和が続くとボケる？

ここまで述べてきて「では本当に日本を侵略しようという国があるのか」と問う人がいるかもしれないが私から言わせれば少なくとも過去の歴史の中で日本に恨みを持っている国は隣国に複数あり、また日本の富を掌中に入れるべく属国化したがつている国もある。

これはあくまで推測の域を出ないのであるが、北朝鮮が韓国に攻め入った場合、（大義としては祖国統一・朝鮮民族開放）アメリカ軍が、アジアはアジア人で解決すべき、とすれば今の韓国軍でも防戦を余儀なくされ、半島の大部分を開放という名のもとに北朝鮮軍が攻め入ることは十分考えられる。そ

してこの段階で日本は韓国への協力として行えることは憲法上、また世論の上においても何もできないといえる。(しいて言えば、日本近海の海上封鎖程度であらう) 沖縄あるいは対馬の空港を軍の離発着に使うといった事も北朝鮮に攻撃される口実になり、難しい。そうこうしているうちに韓国国民は追われ、難民として命からがら日本に漂着する。その数は数週間うちに百万人以上に達し、山陰、九州の各地では難民の収容も限界となり金に困った難民が日本人といざこざを起こす。中には北朝鮮の工作員も潜入し、治安を一層悪化させる活動をする。ここまできて初めてあたふたとしてしまうのが日本人なのである。その時点で日本人は平和がいかに空虚なものであるのかを思い知るのだ。

また、北朝鮮はすでに二千kmの距離をピンポイントで狙えるミサイル開発を済ませ、東海岸からいつでも発射できる体制にあるという。(現に三陸海岸沖に落ちた人工衛星と称するミサイルでも実証済みである。) もしそうならば山陰・北陸・新潟をカバーし、三つの原発を狙い撃ちできることになる。さらに精度を増し、青森・六ヶ所村が攻撃される事となったらチェルノブイリの大惨事では済まず、日本を始め、世界が放射能汚染でたちまち死の国土となってしまう危険性すら秘めているのだ。それに対し今の防衛庁は飛んできたミサイルを迎撃する体制をとるところか領空内を飛んでいたことすら確認できていなかった。最新の高額機器を装備できる環境の中で…それほど危機意識が低く、平和ボケしてしまっているのだ。

四、多くの国民の平和のために

日本はかつて朝鮮戦争やベトナム戦争で特需を受け、国内に利益を享受してきた。しかしアメリカ

は今後、アジアの責任は日本が一翼を担うべきと考え、アメリカは後方支援で今度は特需を受けるつもりだ。そうすれば無用にアメリカ人の若者の血を流さなくても済む。湾岸戦争においても化学爆弾に備えて与えられていた免疫薬を服用していた兵士から退役後奇形の赤ちゃんが産まれたりして社会問題も起きている。そんなアメリカがより積極的に戦地へ兵士を送るとは考えづらい。

太平洋戦争以降、日本人は戦地で血を流すことなく今日まで過ごしてきたが、もはやそれも時間の問題かもしれない。その責任を果すべき外圧が迫りつつある。

日本は今変わらなければならないときにさしかかっているような気がする。多くの日本国民が安心できる二十一世紀を迎えるために。

Gへの想いと思い出と



関東自動車工業株式会社 人事部

中 出 裕 之

〔プロフィール〕

- なかで ひろゆき (36歳)
- ・ 1961年 東京都出身
 - ・ 1983年 関東自動車工業 (株) 入社
人事部人事課配属
生産管理部
横須賀工場管理室を経て、
 - ・ 1997年 人事部へ異動
現在に至る
- 〈家族〉 妻と娘2人
- 〈趣味〉 パチンコ・麻雀あとは文中で

あれは三日前、カープのピッチャーは二番手の小林。得点は六対七。九回のウラニアアウト、ランナーなし。初回から四点を取られ、一時は〇対七の七点差。しかし、今日の試合を負ける訳にはいかない。七回に松井と吉村のタイムリーで二点を返し、八回には清水のホームランで一点差にまで詰め寄った。しかしバッター仁志のあたりはボテボテのファーストゴロ。万事休す。試合終了。この瞬間、開幕五連勝で誰もが疑うことのなかった我がジャイアンツの野望は、はかなくも消え去った。

そして今日、ジャイアンツの先発は桑田。初回到一点を取られたものの、新人で三割を確定させた高橋の逆転タイムリー。そして、百打点目となる松井の三十四号スリーランホームランで、七対一。松井はこのホームランで、打点王と本塁打王の二冠に王手をかけた。六回にカープ江藤のスリーランホームランを浴び、ヒヤヒヤものではあったが、八回ニアウトから新押さえの切り札、楨原が登場。テレビに向かって「フオークだ、フオークだ。」と叫んでいると、あさって三回目の誕生日を迎える次女の優葉が台所からフオークを持ってきてくれた。

試合はこのまま逃げ切り。七十三勝目。目標の七十七勝には届かなかったものの、今シーズンの最終戦を白星で飾ることができた。勝利投手は桑田で十六勝目。この時点でハーラーダービー単独トップ。ヤクルトの川崎、カープのミンチーは残り試合がまだあるため、単独は無理にしても、最多勝利投手賞の可能性は十分ある。右肘を手術した投手が最多賞の候補とは、何と感動的なことであろうか。そしてもうひとり。左ひざ靭帯断裂で、選手生命をも危ぶまれ、奇跡のカムバックを果たした男。そう、あの吉村が今日の試合を最後に現役を引退する。プロ通算百五十号ホームランは結局でなかったが、私の目からは涙が溢れでた。あの事故がなければ、きっとジャイアンツの四番をはっていた男だ。

しかし彼はくじけず、見事にカムバックを果たした。晩年は左の代打の切り札として、一試合に一打席だけの登場。ものすごい集中力だったろう。そして今日の最終戦には七回ウラに桑田に代わっての左打席。セカンドゴロ。これが彼の最後の打席となった。

優勝は逃したものの、何と素晴らしいシーズンであつたことか。我がG戦士と、この二人のカムバック野郎に拍手喝采である。

プロなんだから、生活がかかっているんだから、この生きざまは当たり前？。いや決して生活のためなんかじゃない。ましてや名譽のためでもないだろう。何かに一生懸命でいる彼らが羨ましい。

私のジャイアンツ・ファンは小学生の頃からで、四年生の時から少年野球のチームに参加していた。巨人軍多摩川グラウンドの上流の河原でいつも練習をしていた。全然うまくはならなかった。中学に入ったら野球をやめ、バスケット部にはいった。高校に入っても野球はやらなかった。やる方よりも見る方になっていた。

高校時代は映画に大変興味をもった。金がないから「試写会」を中心に、安い名画座作品を、いろんなジャンルの映画を、片っ端から観た。市川崑監督の「女王蜂」を見た後、「風と共に去りぬ」(全編で四時間位だったと思う)をはしごするなんてのは日常茶飯事だったと記憶している。

高校時代にこういう過ごし方をした人たちは、大学に入ってから映研だとか、演劇の道に進むんだろ
うが、旅行の愛好会に席をおいた。そしてすぐ辞めた。それでも一度だけ、映画のエキストラに参加
したことがある。今村昌平監督の「ええじゃないか」という作品である。主演はなんと桃井かおりさ

ん。草刈正雄さんや泉谷しげるさんも出演していた。助監督の山下さん（何故かまだこの人の名前を覚えてる）に声をかけられた。荒川河川敷きの撮影所まで何日か通った。時代劇なので、エキストラといつても、ただの通行人ではない。ちゃんと衣装も着て、化粧もする。役だってちゃんともらった。「町娘」だった。当時すでに身長は百八十センチ位。山下さんに「いいんですか？変じゃないんですか。」と聞いたが、「平気、平気、はつきり映らないから。」複雑な心境だった。セリフ、振り付きである。両手を高く上に付き上げ、ちようど「泡踊り」の様に動き、「ええじゃないか！ええじゃないか！」と歩き回る。役はもうひとつもらった。「乞食」だった。顔を黒く塗って、ボロボロの服を着て。冬なのに真夏のシーンを撮るという。太陽が顔を出すまで休憩。ボロボロの服は寒い。大衆が逃げ惑うシーン。太陽が雲の間から顔を覗かせた。「本番！」の声が。他の役者さん達（やはりエキストラだが）もみんな真剣そのもの。ほんとのパニックという奴を経験した。みんな一生懸命だ。リハーサルとは全然違う。逃げ惑う時にカツラが落ちた。やばい、こんなところでNGを出してしまった。しかしNGにはならなかった。このシーンでもはつきりは映らない様だ。弁当付き、交通費前で二千円のバイト代だったと記憶している。こんな貴重な体験をさせてもらったうえに、金までもらってしまった。顔に塗りたいくった黒いドウランは全然落ちなくて、電車の中で他の乗客が目をそらしているのがよくわかった。役者（？）としてはこの思い出が最初で最後だった。

「自分自身で何かやる」という経験はこれ位だった。メガホンをとりたいたいと思ったことは何度かある。だけどやったことはない。失敗を恐れているのか。勇気がないのか。やる方よりも見る方が得意

になってしまっている。

産政塾は、「殻から抜け出す」ための参加だ。「何でもあり」とのことだった。講師の方々を招いて、「同調する必要はない。批判すればいい。」とのことだった。でもとてもとても批判なんてできない。みんなスバラシイ。一生懸命生きている。持論がある。意見に同調するつもりはないが、「何でもオレはこんなに生きるのが下手なんだろう。」「ひとつのことにこだわれないんだろう。」全ての回に参加できなかったが、参加するといつも同じことを考えている。

二回目の講師の祖父江さんは演劇をやっていると聞いていた。自分も興味があることを言うと「何故やらない。年齢は関係ない。」と言われた。晩学園よりもそちらの方が記憶に残る。

六回目の講師の角皆さんは氣孔術をやっていると言っていた。フリースタイルスキートの第一人者とのことだが、氣孔術の方が記憶に残る。やり方を少し教えてもらった。手と手の間に風船の様なエネルギーの塊があるのを実感した。あれから何度かひとりで作っている。ゆくゆくは女房の肩凝りを揉み解すぐらいになれたらいいと思っている。

「やる方よりも見る方が得意な自分」という殻を破っていけそうな気が、この産政塾に参加して感じてきた。

そういえば、六回目の産政塾の帰り、名古屋駅の新幹線ホームで工藤静香さんに会った。テレビで見ると変わらない。若い女の子達がキヤーキヤー言いながら、握手を求めたり、写真を撮ったりし

ているのを後ろから見ている。スタッフと共にグリーン車へと入っていった。握手を求められない、声をかけられない、殻の中にはいったままの自分が指定席へと向かっていた。まだまだ修行が足りない。

追伸

社内のインフォーマル野球チームの現役引退を考えてたが、これを書いていて、あと1年だけやってみようかと思っている。

体力の限界というのはよくわかっているのだが、この前の秋季大会で打った3塁打の感触がまだ手に残っている様で。もう守れないだろうから、代打でも。吉村の様に。

子供たちは将来の宝物



トヨタ自動車労働組合

浜 口 誠

〔プロフィール〕

はまぐち まこと (33歳)

- ・ 1965年 5月18日 三重県松阪市生まれ
- ・ 1988年 トヨタ自動車(株) 入社
衣浦工場 工務部 配属
- ・ 1993年 生産管理部計画室
- ・ 1996年 トヨタ自動車労働組合専従
現在に至る

〈家族〉 妻(浩子)・長女(莉穂、2歳)の3人家族

〈趣味〉 ゴルフ・フィッシング

一、日本の人口が今の半分になってしまおう！

○バブル崩壊以降、日本の実質経済成長率は年率平均一%台に停滞し、実質賃金の上昇率も同じく一%台にとどまり、働く者にとっては厳しい状況が続いている。特に、直近の日本経済は、GDPが二年連続のマイナス成長、過去最悪の失業率、デフレスパイラル、先行き不安による個人消費の低迷、などなど過去最悪の状況である。また、年金、医療、福祉など社会保障の今後のあり方についても様々な議論が行われており、私たちの将来生活に対する不安要素が従来以上に大きくなっている。

○こうした中で、日本の将来を考えた場合の最大の課題は、出生率が年々低下し、将来を支える子供たちが少なくなってきたことではないだろうか。平成十年度厚生白書によると、日本の合計特殊出生率（一人の女性が一生の間に生む平均の子供数）は、第一次ベビーブームを過ぎた昭和二十五年頃から急速に低下をはじめ、昭和三十年頃に二を超えるぐらいまで下がった後、昭和五十年頃まで安定的に推移していたが、その後再び低下し、現在まで下がり続けている。平成八年の合計特殊出生率は一・四三と、人口を維持するのに必要な水準である二・〇八を大幅に割り込んでいる。ちなみに我が家は、娘が一人なので、平成八年の出生率にも及ばない状況である。

○こうした出生率の低下による少子化が進むと、日本の人口は現在の一億二千六百万人から減少し、二〇五〇年には約一億人、二一〇〇年には約六千七百万人と現在の半分近い人口にまで減少してしまう。（一方、高齢者人口は、二一〇〇年時点では全人口の三十%弱と現在の二倍となり、二十一世紀の日本では少子高齢化社会が定着しているであろう。）

二、なぜ出生率は低下したのか？

○では、なぜ日本の出生率は低下したのだろうか。日本は、結婚や子育てに「夢」と「希望」を持っていない社会になっているのだろうか。

○出生率低下は、経済の側面からいうと、子供を持つメリット（楽しさ、利益）が減少し、子供を持つデメリット（費用、損失）が経済発展にともない増大することによって引き起こされるといわれている。

○具体的なメリットの減少については、

- ① 社会保障の発展によって、子供に頼らなくても老後の生活保障が確保されるようになったこと。
 - ② スポーツ、レクリエーション、旅行など子供がいなくても楽しめる娯楽がふえたこと。
- などが挙げられる。

一方、デメリットの増大については、

- ① 育児費、教育費など育児にかかる費用が大きくなったこと。
 - ② 育児のための仕事の中断は、賃金、昇格・昇進機会などの損失をもたらすこと。
- などが挙げられる。

○特に、これまでの日本では、育児のための仕事の中断によって、終身雇用と年功賃金のエスカレーターに乗ることが難しくなる。その結果、賃金収入は極端に小さくなり、育児のために仕事を中断する損失は欧米に比べ非常に大きくなる。こうした日本的な賃金・雇用制度のもとでは、結婚や出

産を延期したり、とりやめたりする人々が増え、出生率が低下し続けていると考えられている。

（一方、最近の動向としては、終身雇用・年功賃金制度が崩壊しはじめ、雇用の流動化や男女の機会均等の更なる促進など、これまでの日本型システムの改革が進んでおり、今後の出生率の回復には効いてくるかもしれない。）

三、出生率の回復には、男女の意識改革が必要！

○しかし、出生率の低下の要因は、これまで触れてきた経済的な側面だけではなく、仕事・結婚・家事・育児などに対する男女の考え方や意識の差が大きく関係しているのではないだろうか？

○日本の男性が子育てや家事などを仕事と同じぐらい重要で、家庭生活を営むうえでの基本的なものとして受け止めておらず、家事のほとんどを女性（母親・妻）任せにしていることが大きな問題だと感じている。

○連合総研の調査によると、平日出勤日に労働者が家事（炊事、洗濯、子供の世話、家の修理など）に使う時間は、日本十分、アメリカ六十二分、ドイツ三十七分、イギリス五十九分、フランス六十一分となっている。こうしたデータで見る限り、日本の労働者は、勤勉な働き者として世界的に有名だが、家事や子育てに関してはグローバルスタンダードにほど遠い実態だと言わざるを得ない。

○こうした背景には、仕事は、男性中心のもの、一方、家事や育児は女性が行うべきものであり、結婚や出産を機に女性は仕事を辞め家庭に入るものであるといった、固定的な男女の役割分業や雇用慣行が男性を中心とした多くの日本人の意識の中に存在しているのである。このような環境の中で

は、女性が仕事と家庭を両立させることは困難であり、働きたい女性にとって結婚や子育てに「夢」と「希望」を持ってないのではないかと思う。

○男女を問わず仕事と家庭の両立を図るためには、男女が協力して子育てなどの家事を行うとともに、結婚や出産後もやる気のある女性が男性同様に活躍する場や機会が与えられるなど、男女の役割分業や雇用慣行に対する固定的な考え方を是正し、お互いの「意識改革」を推し進めることが、男女が共に暮らし子供を生み育てることに「夢」と「希望」を持てる社会にしていく第一歩ではないだろうか。

四、自分の家庭を振り返って

○とは言うものの、自分の家庭を振り返ってみると、我が家においても家事や育児は妻にほとんど任せっきりである。時間さえあれば、少しでも子供の世話などで協力してあげたいが、日々仕事を終えて帰ると時間も遅く、家族と夕食を一緒にできない状況では、家事をする時間など持ち得ないといった方が正しいだろう。結果として平日に家事に使う時間は、先程紹介した連合調査による日本の十分にも及ばないのが実態である。

○仕事と家庭の両立を図るためには、メリハリをつけた働き方をすることが大切である。例えば、仕事の中長期の負荷状況を見極め、帰れる時には早く帰ることを習慣づけること、あるいは年休完全取得を目標にするなど、自らゆとりを生み出し、実感できる働き方を自分で工夫することも重要ではないか。

そして、家事や子育てを女性だけの役割とは考えず、作り出した時間を活用し男性も家事などを

積極的に行うことが必要である。私自身も、仕事と家庭責任の両立に向け、働き方の見直しや意識改革にチャレンジしていきたい。

五、最後に

○二十一世紀の日本を支えていくのは、我々の子供や孫の世代である。また、自分たちの老後が豊かになるかどうか、二十一世紀を担う子供たちにかかっているといっても過言ではないだろう。いわば『子供たちは将来の宝物』なのである。

○とすれば、日本の将来にとって極めて重要である出生率の回復を図り少子化に歯止めをかけるためには、男女が共に暮らし、子供を生み育てることに「夢」と「希望」を持てる社会をつくる必要がある。

○私たちがこうした認識をもって、家庭・地域・職場といった生活に深く関わる場において、真の男女共同参画社会の実現に向けて取り組んでいこう。

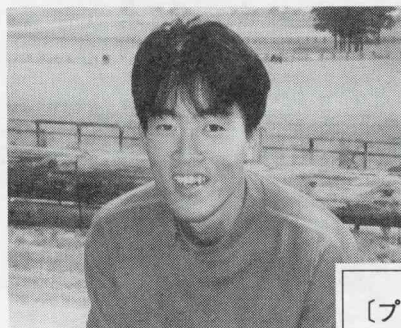
○その前に、我が家には子供が一人しかいないので、今後の出生率の回復に向け、いろんな意味で頑張っていきたい。

〈参考文献〉

平成十年度 厚生白書 厚生省

スタデイ 平成十年五月号 近代労働研究会

記念写真



(株)デンソー 新事業開発部

林 克 憲

〔プロフィール〕

はやし かつのり (33歳)

・ 1965年 愛知県に生まれる

・ 1988年 人事部教育課配属

(管理者研修、社内報編集、事務教育等を担当)

・ 1995年 人事部人事へ異動

(人事情報システム、出向・転籍・退職等を担当)

・ 1999年 新事業開発部へ異動

(先日内示があったばかりで担当業務の詳細不明。初めての営業畑ですごく楽しみ!)

〈家族〉 妻のみ

〈趣味〉 モーグルスキー (先日、産政塾の講師にモーグルスキーヤーを呼んでしまうという暴挙に出た)

プロローグ

「従来の価値観を打ち破り、新しい価値観を形成する」ことをねらいに一年間産政塾の活動に参加させていただいた。その卒業論文で書くのもなんだが、「新しい価値観も大事だけど、価値観は歳とともに自然に変わったりする部分があって、むしろ大切な価値観については、変えない努力も必要だな」などと思っている。

実はこの「プロローグ」は「本文」より後に書いているのだが、本文では十代から二十代にかけての生活の中での印象深いエピソードやその時感じたことについて書いてみた。すると、ありふれた普段の生活の中に、ささやかながらも自分にとっては大切な価値観がたくさんあったのに、それらはいくつかはすっかり失ってしまっていたり、忘れかけていることに気がついた。それは今の生活においても、とても役に立つにもかかわらず。

こんな思ひ出話が論文と呼べるのかどうか甚だ疑問だが、その価値観を今後も持ち続けるために文章化しておこうと思う。

スポーツ

百七十三センチ六十キロ。私はかなり貧弱な体の持ち主である。周りを見渡してもぱつと見て私より弱そうな人はなかなかいない。ところが私をよく知っている人は多分さほど「弱々しい」という印象は持っていないのではないかと思う。これはひとえに「スポーツだけは得意なやつ」という評価の

せいではないかと思う。

小さい頃からスポーツは好きでたくさんさんのスポーツをやってきた。入社後もスキーだゴルフだテニスだと仲間内で流行ると必ずお付き合ひしてきた。なぜかそんな仲間内でいつも「お前は上達が早いな」と言われていた。

小学校の頃、野球選手の形態模写をしては笑いをとることに生きがいを感じていた。まあこのクラスにも一人はいるアホみたいなやつである。しかしアホにも取り柄はあって、人の動きの特徴を上手くつかむことによって、それらしいフォームでスポーツをこなせるのだった。例えばスキーでは、満足に整地でのターンもできないうちから平気でコブの急斜面に飛び込んでいき（これは性格的なものもあるが）、三、四シーズン目にはモーグルの大会に出場していた。ゴルフでは、「アプローチの基

本は手前から転がすこと」という諸先輩方のアドバイスを聞かず、「フワッと上げてピンの真上から落とすアプローチがかっこいいな」などと考え、初心者のうちからプロのロブショットをまねてはい気になっていた。バスケットは、野球は……。すべて同じである。とりあえずある程度のところまではすんなりできる。しかし実はこれが自分の最大のウィークポイントでもあったのだ。

高校の頃はラグビー部に所属しており、顧問の先生から言われた言葉がいまだに心に残っている。ちなみに先生は全日本代表の経験もある確かな技術と眼力をお持ちの方だった。

「林は確かに上手いよ。でも本当に強い選手にはなれない。お前みたいにすぐマスターしちゃうタイプは、何回やってもできなくて、それでもあきらめずに歯をくいしばってマスターしたやつには絶対勝てない。」

その時は「ふーん。そんなもんかなあ。」位にしか思っていなかったが、三年生になるといやでもそれを痛感せざるを得なくなっていた。体育の授業ですらお荷物だったチームメイトのイトウ君がラグビーにおいてはチームの中心プレーヤーとしてまさに強い選手として成長していたのである。とても運動センスがあるとは言い難いイトウ君は来る日も来る日もさぼることなく練習を黙々とやっていた。一方でそこそこの練習しかしなかった私は「今日の試合は林のせいで負けたんだ！」と先生から名指しでしからなければならない程度の選手にしかねなかった。しかも私とイトウ君の実力の差は相手が強い時程大きかったように思う。

初めからその分野が得意な人はある程度までは順風満帆だが、その分壁が大きかったり相手が強大だったたりするとすぐくじけてしまう。これはうまくいかない状況を乗り越えた経験がないからであろう。逆にうまくできない人があきらめずに何とかやり抜いたものは、めったなことではくじけない強いものになっている場合が多い。これはスポーツに限らず、全てのことに言えると思う。

幸い……といってよいのかどうか分らないが私には仕事の才能があまりないようである。数学は苦手だし、ロジカルな考え方もできないし、交渉時の押しも弱い。しかし今はこうした才能に恵まれなかったことが、仕事へのアドバンテージだと思うことにしている。「努力する才能」は万人に与えられているはずなのだし、不得意を克服して得たものは自分にとっての最大の強みになるのだから。

ロツク

この論文集がいつ発行されるか分からないが、今は十一月である。朝夕はひんやりしてきて街路樹

の葉が枯れ落ちて道路に舞っている。この位の時期になると必ず古いビートルズやジョンレノンのレコードを引っ張り出してきて聞き始める。そしてそれは十二月八日まで続く。振り返ると、この習慣はもう十八年間も——一九八〇年十二月八日ジョンレノンが射殺された日から——続いている。

学生時代はバンド活動に明け暮れていた。プレイするのはエルビスコストロ、ニッケロウといったイギリスのパブロックというジャンルのアーティストたちである。今でも彼らの新譜は聞き続けており、ライブがあれば必ず駆けつける。一方でジョンはそういったお気に入りのアーティストとは別のところに位置している。好きとか嫌いとかというレベルを超越して別格の存在感を持って自分の中に居続けている。音楽の枠を超え日常生活の中の価値観にまで影響を与えた唯一のアーティストなのである。

ジョンレノンというビートルズの印象が強いと思うが、歌詞においては解散後のソロアルバムの中にインパクトのあるものが多い。「ジェラスガイ」という曲では「いかに自分が嫉妬深いか」を歌い、「マザー」という曲では母親と死別して叔母に預けられた境遇を「お母さん行かないで、お父さん帰ってきて」とストレートに歌った。これらの曲に限らずジョンは常に自分の心情をそのまま歌にしてきた。

当時、ジョンはすでに富も名声も人気も得た、まさに申し分ない成功者だった。それらのどれひとつとして得たことのない私には成功者たる気持ちは全くピンとこないが、これほど悩み傷ついているということが自分にとっては大きな驚きだった。何よりも三十歳を過ぎたいい大人が「ずるさ」「軟

弱さ」といった自分の弱みを世界中にさらけ出してしまふことには戸惑いすら覚えた。とかく十代の自分は見栄っ張りで自分を強くみせたいという思いも強かっただけに、よけいにジョンの歌にある「一切カッコつけないリアルなメッセージ」に心を打たれたのだと思う。

売れてなんぼのロックビジネスの世界において、「セールス」より「自分の想いを純粹に表現する」ことを重視するミュージシャンは今も昔もマイノリティである。当時、セールス的にはジョンのレコードより売っていたものはたくさんあったが、それらの多くは単に流行のサウンドを使つた一過性のブームに過ぎず、十年二十年たった今も聞かれているものは極めて少数である。結局、人にどう思われるかを計算して作つた曲が人の心を打たず、自分の想いだけに忠実に作つた曲が人の心を打ち、いつまでも愛されるのだと思う。

組織の中の私は、円滑に物事を進めるためにあまり自分の主張に固執せず、他人に合わせるタイプである。一見集団の中で便利に映るこうした「融通のきくタイプ」は、結局新しいものを生み出さないし、人を感動させることもできないことはなんとなく分かっている。ジョンのレコードを聞いていると、もつと自分の想いに忠実に生きることが意義深いことに思えてくる。

エピソード

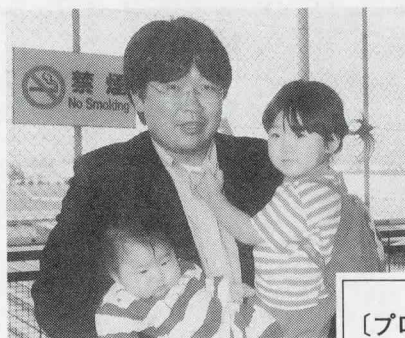
本当はもつと「情報化」とか「国際化」といった、産政塾論文集にふさわしい題材で書きたいなとも思ったが、やっぱりカッコつけないことにした（もし無理して書いたとしても人の意見の受け売りで4千字埋めるのが精一杯だったことと思うが）。

その結果取り上げた題材が「スポーツ」と「ロック」では知性のかけらも感じないが、ここに書いたことは人から教えられたものではなく実体験の中から得た価値観である。とくに十代から二十代という多分人生の中で最も感受性が瑞々しい時期の経験によるものであり、そうした中から得た価値観はその後の人生の展開を少なからず変化させてくれたような気がする。おそらくは好ましい方に。

こうして書いてみると、あらためて気づいた点、思い出したこと等もあり、未来の自分に読ませるためにも記録できてよかったなと思っている。どうしたって人間の記憶は時間とともに褪せていくのだし、特に日常においては忘れがちなことでもあるし。

結果としてこの文章は私の価値観の記念写真みたいなものになったように感じている。

来るべき時が来た



アイシン精機(株) 人材開発部

平岡 典明

〔プロフィール〕

ひらおか のりあき (35歳)

- ・ 1963年 6月20日 徳島県徳島市生まれ
- ・ 1986年 アイシン精機株式会社入社
第1営業部トヨタ営業3課に配属
- ・ 1991年 人材開発部ライフサービスグループ
へ異動
- ・ 1998年 人材開発部グローバル人材グループ
へ異動

〈家族〉 妻(ゆかり32歳)、長女(由以奈2歳)
次女(由妃0歳)

〈趣味〉 ラグビー・飲み会

(はじめに)

十月二十九日に産政塾の丹羽さんより何やらファックスを頂いた。内容はレポートの提出期限についての連絡であった。「いかん忘れとった、早よやらな！」と考えながらもなかなか手をつけられない状況が続いていました。

十一月十九日、二回目の督促状まで届いてしまった。これ以上、迷惑をかけられないと、大したテーマではないが、最近の私の身近に起こった出来事(所属しているラグビー部への会社側の支援中止の通告を受けたこと)に対して「自分なりの考え方(たわいもない心のモヤモヤ)」を書くことにさせて頂きました。

(自分にとってのスポーツとは)

「自慢」と捉えないで頂きたいが、私は、幼い頃からスポーツにかなり情熱を燃やし、打ち込んできた人種ではないかと思えます。

小学校時代には、剣道に熱中し、四国大会優勝そして全国大会への出場を果たしました。中学校時代には、剣道だけでなく、砲丸投げの県大会で三位入賞、そして高校時代からは、ラグビーを始め、一年生と三年生の時に南四国大会優勝、そして全国大会(花園)に出場を果たし、高校日本代表候補にも選ばれました。

大学は、ラグビー絶頂期の同志社大学に入学し、一・二・三年生と三年連続で学生日本一を経験

（私は試合には出られませんでした）することができました。「それぞれの時代につらい経験と自分なりの努力をした結果が、かなり高いレベルで報われてきた。」と、今になって振り返ってみると幸せに感じられます。

大学卒業後、アイシン精機に入社すると共に、すぐにラグビー部に入部させて頂きました。この頃は、会社側もオールトヨタスポーツ大会という（社内スポーツクラブ活動を強化・支援すること、社員の活性化を狙う。）一大イベントが非常に盛り上がっていた時期であり、会社側は、選手補強から運営経費まで、積極的な支援を行ってくれていました。私も、今まで培った経験を仕事だけでなく、クラブ活動強化にも生かさせて頂こうと、入社以来十二年間懸命に取り組んできました。

しかし、ここ数年は、他社同様に会社からのクラブ支援は急激に縮小されつつあり、選手補強ゼロそして予算カットの連続となっており、活動が続けるのが精一杯の状況でした。このような状況の中でも、四・五年前にチーム補強のために入社した若い世代が、まだまだ強くなることに意欲を見せており、「何とかして報いてやりたい」と、また「ラグビーというスポーツを本当に気に入っている」私は、三十五歳の老体にムチ打って試合に出場し、会社側にもできる限りの支援を継続してもらえよう、交渉を続けてきました。

（ついに、来るべき時が来た）

企業スポーツとは、日本においてスポーツ振興を続けていくためには、絶対に必要なものであります。何故なら、日本流にスポーツ界を発展させた一番の功労者であると考えからです。また、欧米

のスポーツ支援思想を取り入れようとしたJリーグサッカーにおける地域密着型運営体制の行き詰まりは、このことを裏付けていると考えます。

「何でも、欧米の考え方が優れていると捉え、日本で馴染めることは、正しくはないのである。」

しかし、ついに、当社（アイシン精機）においても「会社側がクラブ支援にピリオドを打つ。」という通知を受け取ることになってしまいました。（現在のような不況下では、企業として仕方ない選択かもしれないが）一部のクラブを除き、残り約二十種目のクラブへの支援を中止するというのである。どのクラブを「残す」「残さない」よりも前に、経済が安定し、景気が回復した時には、クラブ支援の考え方も回復するかもしれないという一部の望みも絶たれてしまったのです。

先日アイシンラグビー部の（関西Dリーグ）最終戦が金沢で行われました。対戦相手は、NTT北陸、会社が現在も積極的な支援を続けてくれ、強化しているチームである。戦前から現在の当社のチーム力では、勝てないことがはっきりした試合であったが、すばらしい天候と最高のコンディションの中、予想を上回る善戦することができました。私をはじめ、全員身体中ボロボロにはなったものの、感動できる最高の試合だったと思います。ラグビーで良く使われる言葉である「オールフォアワン・ワンフォアオール」を久しぶりに実感できたように思います。これは、失礼だと言われるかもしれませんが、健康づくり等の目的でスポーツをやっている人には、殆どの場合、経験することのできないものだ、私は考えます。企業スポーツとは、個人的な健康づくりのためだけでなく、社会人としての人間性を高めて行く上でも、十分に役立つものであり、また会社の同僚や仲間との良き信頼関係を形成していく手段としても有効ではないかと思えます。企業が社員のスポーツ

活動を支援することは、上記以外にも多くのメリットがあるはずです。何よりも、お金に代え難い、スポーツ選手たちからの貢献を会社は享受してきたことも、多くの方々に理解をしておいてもらいたいと思います。

（企業スポーツのかげりについて）

アイシンラグビー部は、私が入社した一九八六年の秋から愛知県Dリーグに加入し、毎年確実に上位リーグに昇格し続け、クラブ員が所属している職場からも熱い応援を受け、東海リーグから関西リーグに加入できる程の実力をつけてきたチームであります。そして、私の社会人生活と共に成長してきたという思いもあり、感慨深くなるのも当然のことであります。

先にも述べたように、日本においてのスポーツ振興は、昔から企業の支援に大きく依存してきたのは明白な事実である。この企業による支援が、近年大幅に削られつつあるということは、日本人によるスポーツ活動自体が衰退していきつつあると感じられます。（事実は知らないが、日本人のスポーツ人口・活動時間も、減ってきているのではないかと思います。）

スポーツは、年齢に関係なく、「観ること」でも「体験すること」でも、誰もが楽しめる数少ない娯楽であったはずなのに、この「おもしろ味」がレベルダウンしつつあると感じるのは私だけだろうか。例えば、「大げさ」かつ「悲観的」に考え、今の状況が進んでいくと、「長野オリンピック」―「サッカーワールドカップ」のような、全国民でのスポーツへの熱狂を、できなくなる時代が来るかもしれないのである。

最近、遠征（試合）に行くバスの中で暇つぶしに読んだ本の中に「境界線上の動物たち」という、絶滅危惧あるいは、絶滅したかもしれない（未確認）動物について調べた本がある。この本を読みながら、私は「前日に聞いた会社側のクラブ支援中止の話」と「取り返しのつかない状況になっている動物保護活動の実態」をいつしか重ねあわせて（同化して）考えていた。

アイシンラグビー部は、絶滅寸前の動物のように生き長らえさせるために、愛知県リーグに戻り、少々の活動費用を部員から集めれば、存続可能である。但し、これでは企業スポーツのメリットどころか、今まで我々が積み重ねた努力が全て消えてしまうのである。

しかし、日本の企業スポーツ支援衰退に歯止めをかけ、当社のクラブ支援を元の状態に戻してもらうことが、絶滅危惧動物を昔の状態に復活させるのと同じくらい困難なことであることは、私も十分に認識しております。

また、このことは再度強行に会社側へ交渉して、もう一年最低水準での支援を続けてもらったところで、結果的に同じことを意味していると考えます。特に、私の場合、今年の二月まで七年間福利厚生業務を経験し、「会社側としての考え方」も「クラブ運営担当者としての苦渋の決断」ということが理解できるだけに、今はただ、非常に悔しいが、仕方ないとしか考えられない自分を情けなく感じているのみであります。

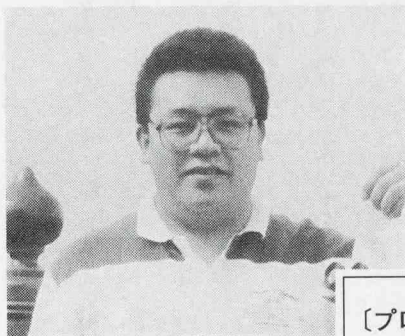
（最後に）

結論の出ない自分の悩みをテーマに「産政塾のレポート」をだらだらと書き綴らせていただいたこ

とを申し訳なく思います。「こんなことを考えている奴もいるのか。」と読み流して下さればと思います。ただ、スポーツに関することをテーマとしておきながら、第六回の角皆氏（フリースタイルスキーヤー）との懇談の機会に出席できなかったことが、残念でしかたありません。

第九期産政塾の皆さん、そして中部産政研の丹羽さん一年間ありがとうございました。この機会に知り合えた方との交流は、今後も続けたいと思いますので、よろしく願います。

元気に生きる！



トヨタ車体(株) 人事部

本 多 篤

〔プロフィール〕

ほんだ あつし (32歳)

- ・ 1966年 7月25日 愛知県生まれ
- ・ 1989年 トヨタ車体(株) 入社
生産管理部生産計画課に配属
- ・ 1995年 人事部第1人事課に異動
- 〈家族〉 妻、長男(4歳)、次男(0歳)
- 〈趣味〉 スポーツ観戦(野球、ラグビー)、釣り

最近思うこと

会社に入社してはや九年が過ぎた。その間に人生の伴侶を得、つい先日二人目の子供も生まれた。自分なりに幸せな道を歩んでいると感じてはいる。会社生活においてはそれなりの人間関係を築き上げ、それなりに仕事もし、家庭においても夫としてまた父親としてそれなりの役割を果たし、特に人生を揺るがすような大きな問題とも出会わず、安穩とした日々を過ごしている現状を省みた時、一見このままで十分のようにも思われる。しかし、最近何かが足りないような気がするのである。「よし！ やったるで」というような意気込みが自分から消え失せつつあるように感じてならない。これからの長い人生このままでいいのか、いやいいはずがない。このままいくと自分の人生の終焉が訪れた時、後悔の念にかられるに違いない。そのためには今をもっと前向きに『元氣』に生きていかなくては。

趣味と実益

この頃ふと考えることがある。「自分は何のために働いているんだろうか」と。やはり第一には現在の暮らしを維持するためであろう。しかし、暮らしを維持するという程度の気合いで人生の半分ともなる勤め人生活を『元氣』に過ごせるだろうか。結婚して、子供を育てて、家を建てて、それなりにつきあいをして……。定年後に子供の世話にならずに暮らせる程度のお金が残れば上出来な方ではないか。本当にその程度で良いのか。生活の糧のためにだけに働くということではこれからの長い勤め人人生、『元氣』が続かないように思うのである。

では、もっと馬力をかけてじゃんじゃん稼ごう。なにで稼ぐか。勝負ごとにさほど強くない自分にとってはパチンコ、競馬じゃ、まず稼げそうにもない。それに遊びで稼ごうなんてみみっちい。じゃあ年末ジャンボに賭けるか。この類一度も当たったことのない自分にはまず無理な話であるし、他力本願ではなさない。かといって大金を稼げるような他人より秀でた才能があるわけでもないし、要するに卓抜して稼ぐというのは自分には現実感がない話である。

そうすると、第二に本業（仕事）を楽しむのが大事だということに気づく。もし、仕事を楽しめるようになつたら、お金を頂きつつ楽しめるのだから「趣味と実益」を兼ねることになってまさに最高である。ブツブツ言いつつ暮らしを維持する程度の志で働くのと比べればおおいに『元氣』ではないかと思う。仕事を楽しんでいるかどうか。楽しめない理由は何か。では楽しめるようになるためにはどうすべきか、常にこれを考えたい。考えるから日々の暮らしに刺激がある。人間は習慣の生き物であると思う。考えるか考えないか、刺激的かマンネリか。ここが『元氣』人生の分かれ道ではないかと考える。

余暇を楽しむ

第三に、余暇を楽しむのも『元氣』に通じるのではないかと思う。もっとも自分にとって、これがなかなか難しい。当社では労使で年休カットゼロという年休の時効消滅を出さないための取り組みをしている。恥ずかしい話ではあるが、自分自身毎年達成してはいるものの、その達成に四苦八苦しているのが現状である。要するに何とかして余暇の時間を作り出そうという意識が足りないのである。

もしかすると仕事でもなんとなくブツブツ、余暇もパーッとしないなんてところに今の『(非) 元気』状態があるのかもしれない。煎じ詰めれば、今の暮らしにさしたる不満があるわけではないが、さりとて十分満足しているわけでもないのである。

満足いく人生とは

戦後の日本はみんな貧しく、暮らしを維持するのが精一杯だった。今日でも口を開けば「もっとお金があつたらなあ」と、ぼやく人は少なくないが、さりとて本気で暮らし向きを心配している人は少ないと思う。先日読んだ雑誌に家計簿をつけて暮らしを計画的に展開している家庭は、圧倒的に少なくなっているという記事が載っていたが、要するに暮らしの切実感などは過去の話しになったのである。必死に生きるという状態ではなくなつたということだ。(ちなみに我が家では私の稼ぎが少ない? せいか女房が夜な夜なパソコンに向かい家計簿をつけているが：)

ところで人生とはなんだろうか。人生とはお金だろうか。人はパンのみに生きるに非ずというのはキリスト教の専売特許ではない。もちろん、人はパンがなければ生きられない。にもかかわらずパンのために生きるのではない。パンを食べた後に充実した人生とはなにかを求めて生きるものだというわけである。その伝でいけば、昔はパンを必死で求めるような貧乏状態であつた。今日では充実した人生とはなにかが見えてこないという貧乏状態なのである。

「充実した人生」が見えたら、それが「人生目標」ではないかと思う。目標なんていつもは意識していないが、それを明確に意識できたら、もっと『元気』を感じずに違いない。そして、それを追いか

けるとなればさらに『元氣』がでる。『元氣』を追いかけて生きるから満足できるのではないか。人生設計とは「自己の生き方を考える」作業ではないかと思うのである。

ところで『元氣』とは病氣にかかつていないことではない。少々のお金があることでもないと思う。事実、病氣にかかるとそれを早く治そうとして猛然と『元氣』エネルギーが沸く。現実には病氣にかかつていないからこそ（元氣だから）不摂生をして限りなく病氣に近づいているのである。お金が足りなければ、なんとかして作ろうと頑張るから『元氣』になるのである。要するに追いかけるべき「人生目標」こだわりを持った「生き方」が見えない、だから『元氣』がなくなるのではないか

『元氣』がある人というのはなにかにこだわっているように思う。たとえば長時間粘って小魚を釣る。「やったあ」と一人ご満悦。要するに『元氣』とは「自己満足」の世界のものとも言えるのではないか。さりながら「あいつの釣りはたいしたもんだぜ」などと他人に評価されるようになったらさらに『元氣』が増幅するのも事実である。「他人による認知」も大いに『元氣』に貢献するのである。さらに人間は結局一人では生きられない存在だから、他人に頼りまた頼られて生きているのだが、他人に頼られ、その他人の役に立ったと感じる時、最上等の『元氣』な状態となるのではないか。ボランティアなどはその典型ではないかと思う。ここ最近当社でも社会貢献の一環として寝たきりのお年寄りや重度の身体障害者に対する車椅子移送サービスへの取り組みを始めたが、参加した人の話を聞いていると本当に『元氣』である。自分もたまには土、日曜日の休みを使ってボランティア運転手として『元氣』になってみようかなと思っている今日この頃である。

連帯の元氣

最近「連帯」という言葉が死語になりつつあると思う。「連帯」とは、つまり「相互依存」である。最近どの会社でも「実力主義」「成果主義」が取り沙汰されているが、大事なことは、どんなに優秀でも一人の能力にはしよせん限界があるということである。皆が協力・協業するから偉業を達成できるのだという喜びを創造する「連帯主義」こそが本当は問われているのではないか。

かつてエスキモー犬に橇を引かせて世界初の南極点到達を成し遂げたノルウェーの探検家アムンゼンは、犬を並列ではなく直列につないだという。もし並列につないだら犬のベクトルを合わせるのにずいぶん苦労したにちがいない。少し言い過ぎかもしれないが、競争させればすべてうまく運ぶという昨今の風潮は、まさにエスキモー犬を並列につなぐのと同じではないかと思う。

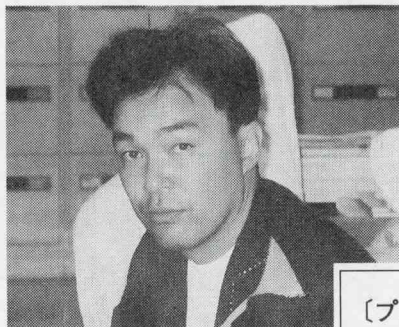
人間はあらかじめ「連帯」する存在ではないが、『元氣』な「人生目標」を持った時に「連帯」の必要性を感じるのだと思う。

今、私たちは給料が安いから、分配が不公平だからやる気が出ないのではなく、むしろ『元氣』の発露の対象が明確じゃないからやる気が出ないのではないか。だから、各個人が自分の人生をじっくり考えることを出発点として、個々の『元氣』を引き出し、会社の『元氣』につなげていくことが最大の課題ではないかと思う。

おわりに

もともと文才のない自分が思いついたままにだらだらと書き連ねてきて最後には会社の『元氣』などと話しが飛んでしまった気もするが、今回産政塾に参加させていただき、色々な講師の方と出会い、話しをしていく中で本当に皆さん『元氣』に生きているなと感じさせられ、自分も「このままではいかんぞ」と考えさせられた。このような機会を与えて頂いたことに心から感謝し、終わりにしたいと思う。

海外ひとり旅ノススメ



デンソー労働組合

前 川 武 治

〔プロフィール〕

まえかわ たけはる (33歳)

- ・1965年 愛知県生まれ
- ・1991年 日本電装(株) (現在の(株)デンソー)
に入社 (生産技術部に配属)
- ・1996年 デンソー労働組合出向
現在に至る

<家族> 独身

<趣味> スキー・パチンコ・海外旅行

一、はじめに

最近あまり耳にしなくなったが、『成田離婚』という言葉聞いたことはないだろうか？結婚式を挙げ、アツアツであるはずの新婚旅行から帰ってきたカップルが、すぐに離婚してしまうというものである。原因は様々であろうが、一つに『海外での男性の頼りなさ』にあると言われている。誰もが海外へ行く時代、特に女性は結婚前に二、三回は海外へ行っているのが当たり前の時代に、すべてがお膳立てされた出張や、がちがちのツアーでしか行つたことのない男性はトラブル発生時に頼りなく、将来を託すには不安を感じてしまうのであろう。

私が勧める海外でのひとり旅には、言葉も話せず、誰も頼りにできない異国の地で様々な出来事に遭遇し、その国の文化や人とのふれあいがある。そして、それはひ弱といわれる根性を鍛え直し、グローバル化が声高に叫ばれる中で広い視野を養うことができる経験なのである。時間とお金のある人は、暇な時にこれでも読んでもらつて次の海外旅行の参考になればと思います。

二、旅行準備における四ヶ条

①行き先決定の情報ソースは厚めのパンフレット

まずは行き先を決めることから始まるのであるが、これが旅行自体の次に楽しいことである。お金との相談となりがちであるが、時間をかけてゆっくり検討することを勧めたい。ツアー旅行はメインポイントをほとんどカバーしているので写真の多い厚めのパンフレットでチェックし、ガイドブック

を本屋の立ち読みで詳細を確認し、よく検討しよう。お勧めはパンフレットではJAL地球紀行、ガイドブックでは世界遺産観光ガイドなどが検討する上で多いに参考になると思う。

②喫煙席は航空券申し込み時に！

行き先が決まれば、航空券の手配に入るのであるが、入手方法はHISなどの格安航空券ショップで手に入れることができる。半年前ならまずピークシーズンでもほぼ取れると思って大丈夫である。ただし、一ヶ月前までOKは出ないので気長に待つこと。また、私のようなスモーカーにとって重要な喫煙席を確保できるかであり、十数時間の禁煙は耐え難いものがある。経験則から言うと、申し込み時に喫煙席をお願いしておくことが一番良い。安い席は後部に設定してあるため取れることが多い。当日カウンターでは遅すぎる。ただし、最近では喫煙シート廃止の方向。

③荷物最小限の法則

海外旅行といえば、大きなスーツケースというイメージであるが、私の場合はデイバックひとつあれば十分である。衣類はできるだけ少なくし、安いホテルでもタオルぐらいいは置いている。ドライヤーは帽子があれば必要ない。「荷物最小限の法則」と呼んでいるが、そのおかげで荷物を預ける必要がなく、海外ではかなり多い積み違いなどのトラブルに合わなくてすむ。さらに、何かの時には両手が使え、走ることもできるのである。海外において荷物を自分の手元から離すことは、「盗んでもいいよ」と言っているようなものでツアーなどでよくカウンターやバス乗車場付近に並べてあるが非常に危険であり、何やら添乗員ともめているのを見た時は「盗まれちゃったのかなあ？どうするんだろう」と想像しながらダウンタウン行きのバスに乗ったことが数回ある。

④ガイドブックは地球の歩き方と観光用の別ガイドを！

ガイドブックで最も有名なものは「地球の歩き方」であり、バックパッカーにとって必需品である。しかし、交通手段や安宿については体験談なども載っており申し分ないのだが、観光については少し不足している。それを補う意味で別のガイドを持っていくことがお勧め。写真が多く小さめのものが多い。現地で迷った時にその写真を見せるだけで行き方を教えてくれる。

三、旅行時における五ヶ条

①海外のホテルは部屋があいていればチェックインがあたりまえ！

旅行に出发し、現地に到着したらまずホテルの確保が第一である。空港には予約専用の無料電話が設置してある。いろいろな国の人があるので、かたことの英語でOK！その上で、今使える部屋があるか確認すること。海外では部屋が空いていればすぐに使用させてくれる。荷物も部屋に置いてとりあえず寝床も確保。ただし、貴重品は肌身離さず！

②観光案内所で情報収集を

現地ツアーの情報や最新の交通機関のスケジュール、イベント情報などを入手するには観光案内所（？、！のマークが目印）がベスト。無料の各種割引券なども置いてありお得、ちゃんと日本語の周辺ガイドもある場合が多い。また、現地ツアーなどは質・量とも豊富で、日本申し込みに比べ半額といった感じ。場所はメイン観光地にあることが多いので、ホテルチェックイン後その場所を直指することをお勧めする。

③バスは運転手をうまく使え！

現地の観光ツアー以外で観光地を訪れる場合、移動に最も困るのだが、バスでの移動がお勧めである。バスはその土地の人が多く使用しており、文化や人とふれあいがある。私はバスで小さな子供と遊んでいたら、両親に気に入られ、泊めてもらったこともある。ただ、私も含めて語学力が不安という方は、バスの運転手に行きたいところの写真を見せるだけで、目的地到着時に教えてくれる。バスの運転手をうまく活用しよう！

④日本人ツアーの後ろがおいしい

バスでやつとの思いで観光地に到着し、観光客の流れやガイドブックを頼りになんとか一人でも観光はできる。また、現地ツアーで参加した場合にはルートには困らないのだが解説が英語であり、まったくわからない。自分の目で見ただけでもいいのであるが、その国の歴史や文化を感じとるには少しもの足りないものである。そういう時には、日本語を話せるガイド付きの日本人団体観光客の後ろについていこう。世界どこへ行っても日本人観光客はいる。現地ツアーで申し込む場合は、日本申し込みのオプショナルツアー主催会社の名前をチェック！その会社に申し込めば、もれなく現地料金で日本語ガイドがついてくる。

⑤子連れの観光客は絶対安全

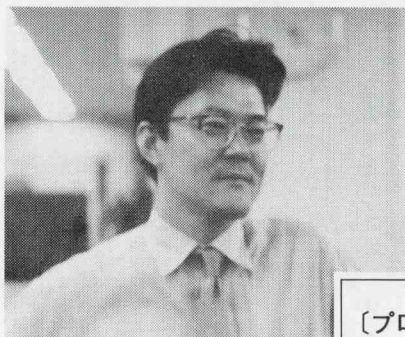
海外旅行において観光地での自分が写った写真は記念であり、なんとかして撮る必要がある。しかし、写真を撮ってくださいとお願いした人に持ち逃げされたり、三脚も盗まれることが多々ある。最近では使い捨てカメラが普及しており、よく海外旅行者が持っている。それもよいと思うが、観光地

における日本人以外の観光客はかなりお金持ちが多くまず安全。特に子連れ的女性は絶対安全であるので、シャッターを押してもらおうことをお願いしよう。また、日本人ツアー客は閉鎖的で冷たい場合が多い。特に新婚旅行？はかなり脅されているようで無視されることもある。ただ、私の服装があまりよくないのかもしれないが：

四、おわりに

とりとめのない話を書いてしまいましたが、これは今まで私が十数回海外にひとりで行ってきた上でのノウハウです。バックパッカーはいかに安く旅をするがポイントであり、安さを自慢する人もいるが、私はリゾート地では高級ホテルにも泊まるし、移動に飛行機も使う。そういう意味ではバックパッカーの邪道かもしれないが、ただなんとなく体験に対する割安感を求めているような気がする。これを読んだ人にとって役に立つかわからないが、長い人生の中でせめて一回ぐらいはなにもかも忘れて『海外ひとり旅』はいかがでしょうか？

自分をさがして



名古屋鉄道(株) 人事部

山 田 泰 準

〔プロフィール〕

- やまだ やすのり (34歳)
- ・ 1965年 名古屋市生まれ
 - ・ 1988年 名古屋鉄道(株)入社
3年間の研修を経て
 - ・ 1991年 経営企画部
 - ・ 1994年 航空事業部
 - ・ 1997年 人事部

小さい頃は医者に憧れていた。いつも皆からありがとうと言ってもらえる、手術をする姿もかっこいい、その程度の理由で十分だった。とはいえ、適性というのは人の人生を左右する。「図画工作」も「技術・家庭科」も全く駄目であった私には、手先が不器用では良い医者になれない、という壁が立ちはだかる。いつしか夢はついた。

高校に進学。将来像は全く浮かばない。ミュージシャンになりたい、大学の先生は面白そう（楽？）だ。アタマの中身は落ちていく一方。思春期にありがちな「色気」もその原因か。要は、異性にキヤークヤーク言われないだけ。とはいえ現実は一層厳しく、女の子にモテるなんてことは夢のまた夢。コミックバンドで間抜けな歌を披露するのが関の山。それじゃあ、お笑い路線に徹しきれるかといえばそうでもなく、やっぱりカッコイイほうに未練が残る。クラブ活動もこれといった輝かしい戦歴は皆無。通学に往復三時間かかるから、と言い訳しつつ学業成績は急降下（落ちるほど高く飛んではない、という説あり）。すべてにおいて中途半端な高校生活になってしまった。

クラスメイトが、よく遊びよく学べ、を実践している中、無意味な日々を過ごす。学校をさぼり、喫茶店で、ゲームセンター（懐かしい響き）で時間をつぶすのだ。ドロップアウトする度胸もない。落ちこぼれの私にとって、高校の三年間は針のむしろであった。

どうしてこんなことに？どこで間違えたのか（はっぴいえんどみたい）。なぜこんな自主性、自立心のまったくない男になってしまったのだ。

中学時代の私は、田舎の優等生であつた。

成績も生活態度も申し分なし（どうせわかりやしないんだから多少の誇張はお許しあれ。願わくば、同級生の目に触れないことを）。教師にも、クラスメイトにも受けがいい。というより、受けがいいように振る舞っていたのだ。手先は不器用であつたが、勉強もスポーツも秀でていた私にとって、そうした事は朝飯前なのであつた（嘘）。最高の「食材」と、それを万人好みに調理できる「腕前」という、中学生ばなれしたイヤラシイ能力が、中学校での私のポジションを盤石なものにしていた。そしてそれは、テレビに出てくるような典型的な「作られた」優等生の姿であつた。

そんな私が高校に入学し、自分の何倍もデキる人々、しかも私のように取り繕っていた者とは違い、自然に振る舞う事ができた人々に囲まれて自分自身を見失つていったのは、今にして思えばごく当然の成り行きであつた。ホンモノとマガイモノの違いである。

とはいえ、たとえ自己喪失したとしてももう一度自分を見つめ直し再スタートをすればよかったのだ。それができなかった。それほど「ガラスの優等生」であつた私は脆い存在であつた（言い過ぎ）。

核爆発後の地球に、再び生命体が登場するまでには気の遠くなるような時間がかかるという。高校に入学して、自我が崩壊した後、次の私が登場するまでには、浪人時代も含めて四年の月日が必要であつた。

浪人時代に予備校で出会った連中は、それまでの私には想像できないような個性的な奴等だった。

彼らの話に耳を傾けているだけで、私は新しい世界を知ることができた。ゾラの全作品を読破し、書簡さえ諳んじていた男は、退廃的雰囲気を漂わせながら自らも小説をしたためる。毎日ジャズ喫茶から予備校へ来ていた奴は、珍しい輸入盤を探して東京、横浜をくまなく駆け巡る。パチプロをめざした彼は、それが本意であつたかどうかは別として、その後雑誌にしばしば登場した。今ではさほど珍しくないであろう彼らのスタイルだが、その頃の私には眩しくて仕方がなかった。同年代でありながら、皆、自分の進むべき道を知っていた。彼らの前で、私は何も取り繕う必要はなかった。取るに足らない「自分」という存在と、初めて向き合うことができたのだ。

いったん自分と対峙できると、あとはスムーズだった。

私の浪人生活は、「奇跡的に」（河合塾チューター談）1年で終わった。

大学は別世界のようなだった。高校生活はできすぎた多くの友人を私に与えてくれたし、何よりも冷却期間として必要な時期であつた。しかし、これは今だから言えるのであつて、十九歳の私が振り返った時、そんな模範解答が見つかるはずもなく、高校生活は楽しかったとはとてもじゃないが思えなかった。その反動もあつたのだろう、私は自分の見つけた進むべき道を歩みつづ、それなりに学生生活を満喫した。名古屋にいた頃には想像もつかない出来事の連続。東京という都市、そしてあふれ出てくる人また人。キャンパスの連中、繁華街のいかがわしい雰囲気、トレンドイースポット（死語）

などともてはやされた幾つもの街。全てが漲るパワーを感じさせた。バブルの頂点へと向かつて突き進んでいた時代のムードもその一因であつたろう。そんな中、「第四次全国総合開発計画」が発表された。それは、チャレンジスピリットというか男子の本懐というか（大袈裟）、そうしたものをくすぐるのにこれ以上はない、というものだった。「開発」「創造」、こんな言葉を並べられるともう駄目だ。くらくらししてしまう。当然、〇〇不動産、〇〇地所などは就職人気上位企業だ（今でも人気だが）。一九八〇年代後半の再開発ブームは、学生にとつても、いにしえの列島改造論もかくや、と思わせた盛り上がり方であつた。それは、開発という仕事をつうじて、自己満足のみならず社会的貢献までもが得られるという幻想が蔓延していたからに他ならない。そして、私もそうした幻想を抱くひとりであつた。

私は、都市の住環境問題解決のため、再開発業務に携わりたいと考えていた。住宅問題に関心を持ったのは、都市が抱えている、あるいは抱えるであろう問題について学ぶ機会があつたからだ、もうひとつ、祖父も父も「家を建てる」ということに関わる仕事をしていたことも関係していたと思う。自分の仕事が生形になつて残る。これこそモノづくりに関わる人の醍醐味である。ニュータウン構想を軸とした再開発事業、そんなイメージがぼんやり浮かんた（そのころ、TBSの「金妻」シリーズで東急田園都市線がフューチャーされていたことも無関係ではない）。

名古屋で就職することにした私は、こうしたイメージを実現できそうな企業を求めた。幸い、中部

地区には、学生の熱い思いを受け止めてくれる企業が無数にある。そして、私は今の会社と出会った（実際はもっと大変でシンドイ就職活動であった）。

入社式の日、偉い人が言った（誰だか忘れた）。

「皆さんは、サービス業の会社に就職されたわけですから、云々」

「サービス業!？」

そうなのだ。名鉄はお客様にサービスを提供することで成り立っている会社だったのだ。これには気がつかなかった。沿線都市開発をするというイメージだけで就職活動をしていたから「お客様」なんて考えた事もない。どうも幾つになってもじっくり物事を考える能力に欠けているのは困ったものだが、正直参った。

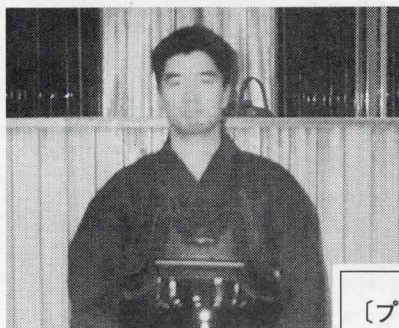
学生時代のアルバイト程度では接客といってもたかが知れている。しかも私の性格は、誰にでもさわやかな笑顔をふりまく、つてなわけでもない。中学時代のように、またしても自分を繕わなければならぬのだ、今度は爽やかな駅員さんとして。

大学時代を経て、少しは気持ちにゆとりを持つ事ができた私は、一年間是我慢(?) することを決めた。いずれは都市再開発に携わるのだ。多少の事は、いや多少でなくても辛抱しよう。臥薪嘗胆。そして、入社三年目、バブルがはじけた。再開発事業も大幅に見直しを迫られた。私のレーゾンデー

トルもはじけた（嘘）。不思議な事に、私自身は、はじけなかった。

あれから七年、あっという間に歳月が流れた。いい歳をして、いまだに自分がわからない。それでも、どうにかこうにかやっている。最近、深夜再放送されている「俺たちの旅」の、最後の言葉がわかるような気がする。

最近思うこと



アラコ(株) 人事部

山 本 雅 章

〔プロフィール〕

やまもと まさあき (38歳)

・ 1960年 愛知県豊橋市生まれ

・ 1983年 アラコ株式会社

(当時、荒川車体工業(株) 入社
人事部に配属

・ 1989年 購買部に異動

・ 1997年 人事部に異動

現在に至る

〈家族〉 妻(34歳)、長女(9歳)、次女(7歳)、
長男(5歳)

〈趣味〉 剣道、野菜作り

一、時について

早いもので社会人となり十五年が経過した。長いようでも驚くほど早いスピードで時はたつていく。十五年という時間は、実に日本が終戦をむかえてから私が生まれる昭和三十五年までと同じ長さである。終戦の混乱期から高度経済成長期へと日本が大きく変わったことを思うと、その長さへの驚きと時が世の中に作用する力の大きさをあらためて実感する。

この十五年に自分の身のまわりで変わったこと。……………

昭和が平成に変わった。会社では事務所であった一台のパソコンがほぼ一人に一台与えられ、電子メールで書類のやりとりまでできるようになった。一回り以上も歳の違う若い人たちと仕事をするようになった。家に帰れば「お父さん」と呼ばれるようになった。年をとったという言葉は自分だけは絶対関係ないと思っていたが、ふと鏡を見れば白髪が出て、皺が出て中年男の顔になっている。どれも十五年前には思いもしなかったことである。

世間では日本がぶつつぶれるくらいの話が渦まいている。大証券・大銀行の倒産、株の暴落、地球環境破壊など暗い話題にはことかかない。これらも十五年前には思ってもみなかったことである。これから先の十五年はどうなっているだろう。たぶんもっと大きな変化が起こるであろうが具体的な姿は不気味に見えてこない。

そんなこれからの時を私たちはどのように生きていけばよいのか。「変化する環境に的確に対応し

……」と、無責任な評論家たちは言うが、では実際に自分自身はどうしたらよいかはつきりした答えが出せない。めぐまれた今の生活に文句のつけようはないが、「私はまじめに一生懸命生きていきます」ということしか言えないのが函がゆくてしかたがない。もっとさかのぼっていえば何のために生きるのか。時の流れに流されるのではなく、生きる目的を見つけたい思いが日増しに強くなっている。

二、大きな力

これも最近思うようになってきたことであるが、私たちは、何か大きな力によって生かされているのではないかと思う。産政塾でフリースキーヤーの角皆さんも言っていたことにも共通する。彼は自分がスキーを始めるきっかけが、何か大きな力が働いて、まるで作爲的に誰かに仕組まれたような偶然がかさなって起こった、と言っていた。私自身もこれまでを振り返れば、そんな思いにかられることがしばしばある。宗教めいたことは論ずるつもりは毛頭ないし、そんなことは全く興味がないが、偶然というにはできすぎているようなことをこの十五年間に何度か経験した。

以前読んだエッセイの中で、物理学の世界的権威である大学教授の話に興味をひかれた。彼もこのような大きな力の存在を感じているとのことである。常識的にいえば物理学者という立場でこんな議論は一蹴にきすべきことであるのだが、この世のことを論理的に考察を進めていくと物理や科学の理論だけでは必ず壁につきあたってしまうという。逆に、神様が仏様かわからないけれど、そんなよう

な大きな力が存在するという前提に立たないと論理的にもなりたない事象がこの世には多すぎる、ということを書いていた。彼は、そこで悩んだすえにそれを認め、その中から自分の人生の指針を見出すことができたそうである。このことを是非紹介したい。

彼曰く、大きな力は私たちをどこかで見ていてコントロールしているそうである。我々が人間である以上、当然自分の幸福を望むものであり、また大きな力も自分の気に入った人間をどんどん良くしていく。これが俗に言う運がいいということになるのであるが、では私たちはどのようにすればその大きな力から良く見られるようになるか、その条件が三つあるという。

まず一つめとして「勤勉」であること。

手始め、足まめに一生懸命働いて前向きに努力すれば必ず良い結果がでるという当たり前の話。次に二つめとして「正直」であること。

これまた当たり前のことであるが、特に自分の生き方や考え方に意志をもって、自分に正直に生きることが大切であるという。裏腹に自分の意にそぐわないことや自分の力の及ばない時は、勇気をもつて「できない」ということも大事な「正直」の一面である。(他人の期待に答えようとして、できそうもないことを「やります」と言いがちになる。後でやらなかったり、後悔したりすることがよっぽど他人に迷惑をかけることになる。)

最後に「感謝」すること。

世の中は自分一人では生きられない。すべての人・物のおかげで生きていることを謙虚に受け止め感謝しよう。もし自分の取り組んでいることがうまくいったら人様のおかげと思うとよくなる。また、もう少しうまくいかなかったら人のせいにして自分で自分が悪かったと思うこと。ややもすれば人に足をひっぱられたと思って悔しくなったり、人を恨んだりしがちだが、自分の責任と思えば腹の立ちようもないし、次に努力しようとする意欲もわいてきて気分的にも楽になるものである。

この三つが整えば大きな力が自分を愛でてくれるということらしい。少し神がかったような話になってしまったが、なるほどとうなづける点がある。日常生活の中で忘れがちになってしまう当たり前で地道なことである。

先に生きる目的とは……という大それたことを言ってしまったが、こういう地道なことをまずしっかりできるようにならないと何ごとともうまく運ばないのではないか。

話が飛躍してしまうが、時の流れの中で、また大きな力の中で生かされているという謙虚さを皆がもって臨んでいけば、この先の十五年は明るく拓けるかもしれない。

三、産政塾に参加して

さて、産政塾ではいろいろな方面で活躍している諸氏にふれあう機会を与えていただいた。

一年前に職場を異動するまでは、とてもえられない体験で、会社のことしか知らなかった自分の視野が一挙に広がった感がある。

講師を担当された諸氏は自分なりの良い人生を歩んでいける達人である。我々サラリーマンには理解したい点多々あったが、自分のライフワークを見つけ、それに全力をかたむけとりくんでいく「勤勉」さ。また、自分の好きなものは好きと主張できる「正直」さ。そして、自分の身の回りの人々に「感謝」して生きる真摯な姿は、まさに大きな力からも祝福される幸せな人生を歩んでいる人たちであると思う。

こうした人たちの生きざまを通して、自分の殻を破ることの大切さを知り、少しではあるが殻をやぶれた気がする。

また、もうひとつの驚きは塾生である労働組合の方々との出会いである。労働組合の執行部の方と話をする機会は今までなかったが、各労組を代表する人たちだけあって、実に幅広い見識とバイタリティーをもっていることを痛感した。おおむね私より年下の彼らであるが、議論におよんでは経営レベルの話を十分理解した上でいうことができるし、日本の政治経済の在り方についても整然とのべることのできることに正直舌をまいた。

一方、会社を代表して参加された塾生も特に人事部門のスペシャリストとしての見識の高さにおどろかされた。

会社生活十五年という年数だけの自分のキャリアでは、塾生諸氏にはおいつけず、ただただ赤面の思いである。

脈絡の無い話になってしまったが、この産政塾での一年は、私の人生にとって強烈なインパクトとなったことを講師、塾生、事務局諸氏にお礼を申し上げたい。

樂ちん！樂ちん？の産政塾

中部産政研

丹 羽 研 次

第九期産政塾は事務局を担当して二期目でもあり、いたってスムーズに企画でき無事終了した。

今期も、塾生の皆さんは、良識があり、羽目は外さず、適当に欠席者もあり、注文も少なく、いたって楽ちんであった。

終塾の際にアンケートを実施し塾生に評価いただいたが、これも高評価であった。「もう終わってしまうのですか」、「おいしい出張でした」、「大変お世話になりました」とうございました」のコメントをいただき、事務局として楽ちん楽ちん。であった。

しかし、産政塾のテーマであった「殻の外へ踏み出そう」に対して、塾生の起爆剤になったかどうか、若干の不安も残っている。

「非健全はおもしろい」

今期の産政塾を通じて、感じたことを二点綴ってみたい。

一つ目は、ある産政塾の席上にこんな論議があった。それは、「スポーツは『健全』でなければならない」という塾生の共通した論議の途中に、「本当にそうか？なぜスポーツは健全でなければならないのか？」との足達塾長の問題提起である。

広辞苑による「健全」は、①心身ともにすこやかで異常のないこと。②ものごとに、欠陥やかたよりがないこと。堅実であぶなげがないこと。であった。

しかし、ほとんどのスポーツには反則がありペナルティーが課せられ、そのペナルティが織り込み済みの社会（競技）であるのだ。サッカーは手を上手？に使い相手を引っ張る競技である。また、バ

スケットのタイムアップ間際に、ボールを廻し時間稼ぎするチームに対して、故意にファールしフリースロー後のリスタートを狙う作戦は僅少差を争う場面の醍醐味である。

Jリーグのある試合の際、飛び出してゴールキーパーのいないゴールに、シュートされたボールをジャンプして手で止めたバックスの選手がいた。見事にキャッチし取りあえずの失点を防いたが、レッドカードによる退場処分と相手側にペナルティキックが与えられた。

このプレーは決して「健全」であるといえないプレーであろうが、見事なプレーであり、さすがJリーガーと賛辞を贈りたい気持ちになった。

我々の社会や企業の教えは、余りにも「健全」過ぎはしないだろうか。非健全とペナルティ（リスク）を織り込めば、もっとおもしろい社会や仕事ができるのではないだろうか。勿論、「してはならないこと」と「非健全」とは別であることを踏まえた上での発想である。これはおもしろい論議であった。

「知性」と「感性」のバランス

二つ目は、「知性」と「感性」のバランスである。

会社の人事部からの塾生が「知性派」に対して労働組合からの塾生が「感性派」というのが一般的なシナリオであるが、残念ながらそうではなかった。人事部、労働組合共、知性派が大幅に優勢であったし、各自が備えている知性と感性も、表面化したのは（させたのは）知性であった。

私の先輩（特に労働組合での先輩）の教えは、多分に荒っぽい感性論であった。提案や人の意見

に対して、氣に入らなかつたら先ず「氣に入らん」と発言しろ。そして、「何が氣に入らんのかを説明できなくても良し」、「説明できればなお良し」、「代案が発言できればもつと良し」なのである。

また、提案や意見に対して、「内容を理解しようとする姿勢で受け止めるな」、「その裏に隠れていることや、その粗を探せ」と教えられた。尊敬の念を込め、無理矢理言い換えれば、「感性」を大切にすることである。この教えは確かに荒っぽく、感性に対して失礼であるかもしれないが、各自が感性で物事を受け止め、感じたままを言動や行動にすることも、時には大切ではないだろうか。

産政塾の重みと役割

今期で第九期となる「産政塾」はちょうど百五十名の塾生を数えるに至った。ある企業の人事部（管理職の方）へお伺いした際に、いきなり、「産政塾のOBです」と快くご対応いただいたり、労働組合の執行委員長に産政塾OBが就任されたり、これまでの産政塾の成果であったかどうかは別として、九年間の重みを感じる。

初代塾長の梅村志郎氏は「産政塾は何でもありだ。犯罪以外なら何をやってもよい。思い切つてやれ」、二代目塾長の足達廣紀氏は「（現代の塾生は）少々なことではショックにならない。もつとドカーンとショックを与えろ。」とバックアップしていただいた。

産政塾は「異業種交流」という触れ込みがあるが、産業や職種が違った程度ではたいした違いはない。大企業の、サラリーマンの、人事部および労働組合の、ではほとんど同じ環境の二十二名であった。これらの塾生の集まりで異業種交流を求めることには直ぐに限界がきてしまう。

今期の産政塾でお訪ねした講師は、大いに偏りがあり、堅実ではなく危なさがいっぱいであった。各講師の生きざまを理解したり、認めることが目的ではなく、その生きざまに触れ、塾生がどう感ずるかを問う企画であった。

塾生の感性に起爆剤を求めて、塾生と事務局の追いかけて競争であった。よって、「大変お世話になりありがとうございます」は心からの感謝であつても競争になつたと評価できずあまり嬉しくはない。

終塾した後、何人かの塾生が、講師との交流が続いていた、また、この塾誌の原稿を読ませていただき、産政塾が塾生の生き方に何らかの刺激となつてゐることを伺つた時、楽ちん楽ちんであつた産政塾事務局としての不安を少し和らげてくれ、追いかけて競争が成立したのだと、ちよつとだけニンマリした。

講師のみなさんありがとうございました

最後になりましたが、無謀な条件にも関わらず快く講師を務めていただいた皆様に心より感謝を申しあげたい。

祖父江文宏さん、また次の危ないことに情熱を注いでおられるようですね。学園の誠君とゆかりさんは元気でやっていますか。

岡本信也さん、飛び入り（無理矢理）でご参加いただいた靖子夫人と、相変わらず仲良く街歩きです。

石原歩さん、ビッグバンを理由に仕事ばかりの毎日ではないでしょうね。二役の次の三役（？）はいかがでしょうか。

湯本裕和さん、山羊は元気にしていますか。味噌は売れていますか。また、きっと次の作物（動物）にトライされていることでしょうね。

角皆優人さん、雪のない名古屋まで起こしいただき申し訳ございませんでした。今度は白馬に押しかけます。

講師のみなさん、本当にお世話になりました。

產政塾活動記錄

《第1回会合》

日時：1997年12月15日(月)

場所：中部産政研、ツインピークス

内容：開塾式

塾長足達廣紀と討論「殻の外へ踏み出そう」

自己紹介、交流会



第9期産政塾に集まった21名の塾生



開塾式と自己紹介



塾長（理事長）足達廣紀



初対面の21名であったが交流会ではすっかり打ち解けて懇談



《第2回会合》

日時：1998年3月24日(火)

場所：養護施設「暁学園」(東海市)

内容：「子どもの虐待問題と施設の運営」

園長「祖父江文宏氏」を訪ねて討論

学園生と交流および懇親会



養護施設「暁学園」を訪ねて子どもの虐待問題を討論する塾生



暁学園園長
「祖父江文宏氏」

学園生にも参加いただき熱
心に討論



同年代の子どもを持つ父親
の塾生には大きなショック
がありました

懇親会では祖父江氏の生き
ざまやこの春に学園を巣立
つお二人も参加して懇親



《第3回会合》

日時：1998年4月27日(月)

場所：名古屋市内（那古野町）、トヨタ自動車(株)名古屋ビル

内容：野外活動研究会「岡本信也氏」を訪ねて

フィールドワークの実践と考現学の視点

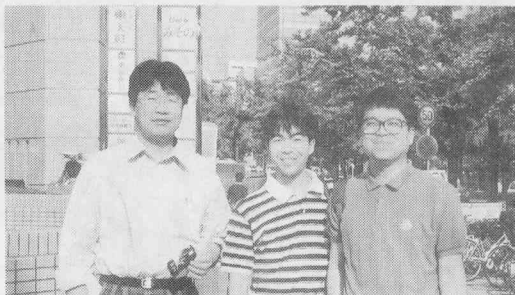
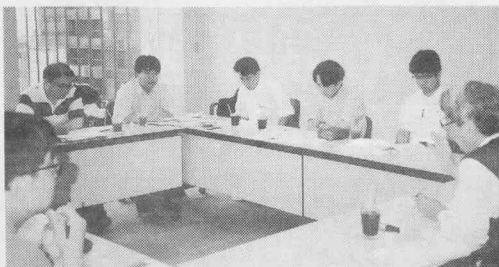


名古屋市那古野町の古い町並みを拠点にフィールドワークを実践する塾生



野外活動研究会
「岡本信也氏」

フィールドワークに関して
説明を受ける塾生



現地へ出向き実践



靖子夫人（右写真の前列右側）にもご参加いただき懇親会

《第4回会合》

日時：1998年5月22日(金)

場所：カフェ・コンセール・エルム（名古屋市内ライブハウス）

内容：シャンソン歌手「石原歩」と損保勤務「野村裕美子」の
二役の人生

ライブ鑑賞と石原歩氏を訪ねて討論



石原歩さんのライブ鑑賞と討論



ライブ後、討論する塾生と最後には記念撮影に応じていただいた



《第5回会合》

日時：1998年6月16日(火)～17日(水)

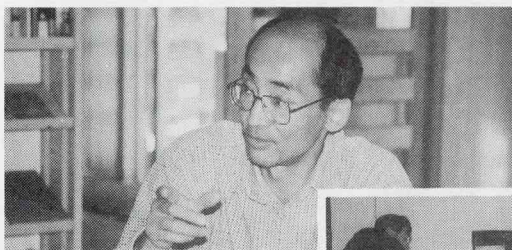
場所：北設楽郡設楽町

内容：設楽農学校「湯本裕和氏」を訪ねて

脱サラ、自給自足、田舎志向のライフスタイル
有機農業の実践

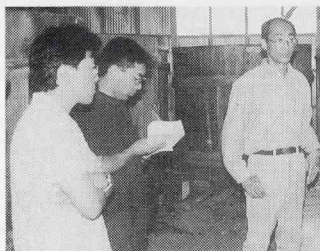


湯本氏の指導により間伐作業の体験



設楽農学校「湯本裕和氏」

農学校の説明を受ける塾生
テーブルのカップは山羊の
ミルク



味噌づくり(後方は味噌樽)
の説明に聞き入る



間伐作業を体験



山羊の乳絞りを体験
味の評価は賛否が分かれま
した

朝食は自家製のパンに山羊
のミルクとバター



《第6回会合》

日時：1998年8月5日（水）

場所：愛知県勤労会館、名古屋市內

内容：フリースタイルスキーヤー「角皆優人氏」をお招きして競技者、指導者として生きざまを討論
長野オリンピックの裏話、白馬を拠点とした生活を紹介



塾生の林氏が企画した産政塾であったが、雪がなくて（8月）残念

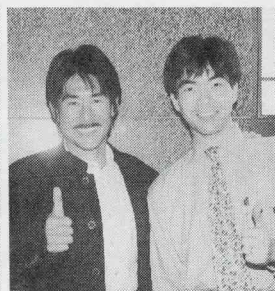
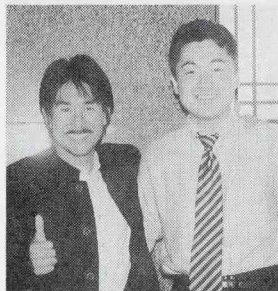


講師の角皆優人氏

フリースタイルスキーへの
関わりや角皆氏のこれまでの
生き方を討論



競技者としてだけでなく
幅広い分野を討論



名古屋の街にもお似合いのダンディな角皆氏と記念撮影

《第7回会合》

日時：1998年8月19日（水）

場所：つどいの丘（藤岡町）

内容：「終塾式」

「塾長・塾生相互討論会」

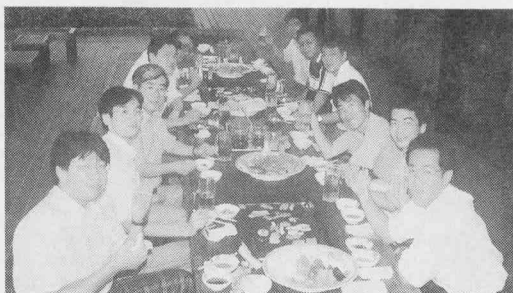
サッカーくじ導入の是非について他



終塾式と足達塾長を交え塾生相互が討論会

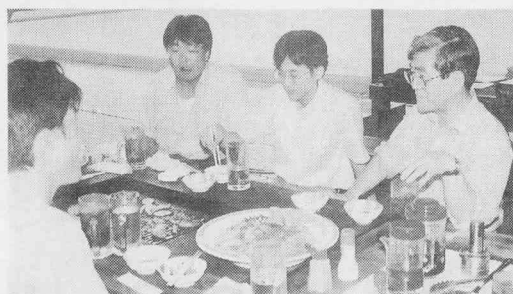


討論に参加する足達塾長



この1年の産政塾を振り返りながら産政塾を終了しました

今回の出会いを大切に今後も交流が続きますことを期待します



産 政 塾

1999年4月12日 第1刷発行

編 者 財団法人 中部産業・労働政策研究会

住 所 〒471-0833

愛知県豊田市山之手8丁目131番地

愛知労済豊田会館 3F

TEL 0565-27-2731

印刷所 (有) 第一プリント社

製本所 山 本 製 本

塾 政 産

塾 長 足達 廣紀

塾 生

松 坂 屋 労 組	足 立 貴 彦
トヨタ自動車(株)	石 井 直 生
豊 田 工 機 労 組	伊 藤 裕 介
全 トヨタ 労 連	宇 野 庄 一
豊 田 合 成 (株)	江 口 淳
中 部 電 力 (株)	見 城 篤
丸 栄 労 組	榊 原 悦 人
(株) 東 海 銀 行	坂 口 登
豊 田 市 役 所	柴 田 徹 哉
トヨタ車体労組	須 崎 辰 彦
中部電力労組本部	玉 木 健 二
アイシン 労 組	恒 川 智 行
関東自動車工業(株)	中 出 裕 之
トヨタ自動車労組	浜 口 誠
(株) デ ン ソ ー	林 克 憲
アイシン精機(株)	平 岡 典 明
日本特殊陶業(株)	古 川 豊
トヨタ車体(株)	本 多 篤
デンソー労働組合	前 川 武 治
名古屋鉄道(株)	山 田 泰 準
ア ラ コ (株)	山 本 雅 章

中 部 産 政 研 丹羽 研次